君の「愛してる」は俺のもの…？

小丹小菜栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君の「愛してる」は俺のもの…？

【Ｎコード】
Ｎ６４７４Ｍ

【作者名】
小丹小菜栖

【あらすじ】
のんびりと売れないバンド生活の知成と臨時マネージャーになった瑛美の恋のお話。音楽ものではなく、コミック調の恋愛物語です。

（一）三人と一人（1）（前書き）

「主人公がボーカリスト」パート3、このストーリーの中に過去作品「恋する男～」「見上げた空～」他の登場人物が出てきます。が、そちらを読まれていなくても問題なくストーリーは流れる予定です。
楽しく読んでいただければうれしいです。

（一）三人と一人（1）

「じゃ、夏木、今日からよろしくたのんだぞ」

夏木瑛美・２５歳は、芸能プロダクション「吉田プロ」の社長室で、社長の吉田と社長よりしっかりしているまとめ役・加山由佳里を目の前に、深くうなづいた。

三人が今後のことを話していると、社長室のドアがノックされ、スタッフのデンジャラス佳代が顔を出した。

「ホーサイレイのみなさんが来ましたぁ。応接室で待ってま～す」

にこやかな顔で言うが、彼女の手にはチョコレートが握られている。

「おい、佳代。おまえは甘い物ばっかり食べて…。結婚指輪が指に食い込んでるぞ、ちょっとは健康に気をつけろ。まったく…病気になったらどうするんだ」

吉田に言われ、佳代は舌をペロッと出しドアを閉め、自分の机に戻り、指輪を抜いてみようと思ったが、抜けず、ガクリと頭をもたげた。

その頃、応接室では、「あまり売れていない」ではなく「全く売れていない」ビジュアルバンド・「ホーサイレイ」のメンバー三人がソファでくつろいでいた。

「あー、腹減ったよぉ、オレ」そう言いながらお腹を押えたのは、ボーカル兼ギター・難波知成２５歳。

「今日はピザにしよぜ、Ｌサイズ二枚！」ベース・高橋一行２４歳が、ガッツポーズをすると、「いいねいいね、フライドチキンも付

けてもらおう！」ドラム・谷山玲二２５歳は寝転がっていたソファから元気よく身を起こした。
　すでに二時を回っているが、この三人、事務所に来る時はいつもお腹を空かせてやって来ては、経費で何かを頼んで食べて帰って行く。

　デビューから五年、二枚のアルバムとシングル六枚をリリース。
　四人で始めたバンドだが、二年前にもう一人いたギター担当とケンカ別れをし、現在は三人で活動している。
　しかし、後からデビューした後輩バンドにも追い越され、人気俳優・タレント・ミュージシャンを多く抱える吉田プロの中では、ダントツ最下位で売れていない。
　なぜ、吉田プロに所属しながらも売れないのか、業界の七不思議でもあると、関係者の間では、噂になっている。
　吉田は、友人である玲二の伯父に頼まれ三人を引き受けたのだが、デビュー当時からパッとせず、どうにもこうにもお先真っ暗状態が数年続いていた。
　知り合いの甥というだけではなく、吉田自身が「ホーサイレイ」を気にいりデビューさせたのだが、アーティストを見出す目の無さに落ち込んだ時期もあった。
が、２年程前から開き直り、三人を野放しにしている。
　当の本人たち三人は、社長の面子も気にせず、「売れない」事にも全く気にせず、のらりくらりとライブをしたり、レコーディングをしては楽しく過ごしている。

　瑛美は、吉田と加山の後に付き応接室に向かった。
　応接室に近づくにつれ、三人の騒がしい声が徐々に大きく聞こえてくる。
「あらあら、いつも元気がいいわね、あの子たちは」

加山が笑いながらも呆れた声で言った。
「あいつらにはＣＤが売れないという悲観さが全くないんだなぁ、これが…」
吉田のつくため息は重いが、顔は笑っている。

開けっぱなしの応接室のドアの前で「おい、おまえらドアくらい閉めて騒げ！」と、吉田が三人に声をかけたが、知成は挨拶もせず吉田に甘えるように「社長、腹減った～、腹ぁ～」と、ソファにもたれかかったまま言った。
「なんだおまえら、昼食ってないのか？　しょうがないなぁ、あとで何か取ってやるから、その前に」と、言った吉田は、後ろに立っていた瑛美の方に顔を向けた。
社長に会っても挨拶もなく、いきなりタメ口で社長に食べ物をねだる、そんな三人に呆れたが、それを許している吉田に瑛美の顔は、歪んだ。
「いつものことよ、社長が事務所のタレントや歌手を甘やかしちゃうのは」
瑛美の隣にいた加山が、こそこそっと瑛美に耳打ちをした。

吉田は、所属タレントだけではなく、吉田プロのスタッフにも甘くやさしいため、代わりに加山が厳しく、ビシビシとみんなの気を引き締める役をしなくてはならなかった。
事務所は、タレント部と音楽部に部屋が分かれており、普段音楽部にデスクを置いている加山が、たまにタレント部に顔をだすと、タレント部のスタッフルームは緊張のあまり静まり返るほど、加山は吉田プロの中では怖い存在になっている。
た　だ、音楽部のスタッフは加山の本性を知っているため、なぜタレント部スタッフが加山を怖がるのか不思議に思っている。
「今日から林田の代わりに少しの間だが、マネージャー業務をやっ

てもらう夏木だ。おまえら、ちゃんと言うこと聞けよ」
吉田の言葉に三人の視線が瑛美に集中した。
「えっ、女なの？」
「きれーなお姉ちゃんじゃん」
「襲っちゃおーかなぁ～、なーんてね」
ホーサイレイの三人はそう言ったあと、大口を開けて笑い合ったが、瑛美は彼らの冗談に乗る素振りもせず、自分の名前を言ったあと、一言添えた。
「林田マネージャーが戻ってくるまで、わたしがビシバシあなたたちの根性を鍛えなおしますので！」
まっすぐな目をして言った瑛美に、ホーサイレイの三人と、なぜか吉田が引きつった顔で一瞬沈黙したが、加山は手を口に当て、クスッと笑った。

「あっ、うんうん、そうだな、夏木にこいつらの根性を直してもらって、少しでもＣＤの売り上げアップを、」
「少しの売り上げアップ？　何言ってるんですか、吉田社長！　目標はベストテン内です！」
吉田の言葉を遮り、瑛美が険しい顔で吉田を睨んだ。

「だよね、だよねー。じゃ、夏木、よろしく頼んだぞ！　ハハハ…」
吉田は頭を掻き掻きカラ笑いのあと、しゅん…と下を向いた。
ホーサイレイの三人は、ポカンと口を開け瑛美を見ているだけだ。

「ほらほら、あなたたち、お腹空いてるんでしょ？　何食べたいの？　デリバリーしてもらうから、言いなさい」
一人顔が笑っている加山が、三人に訊いたあと、吉田、加山、瑛美はスタッフルームに戻った。

（二）三人と一人（2）

応接室でデリバリーのピザを待っているホーサイレイ三人は、どんよりしていた。

「あの女、なんなんだよ。林田さんの代わりだろうけどさぁ、えらそーじゃん」

知成が唇を尖らせふてぶてしく言うと、玲二がソファにゴロンと寝転がり「林田さん…早く復帰してくんないかなぁ」と天井を見たまま呟いた。

「な～んで手を先に付いちゃうかなぁ、林田さん…」

「運動神経、鈍いんだもん…林田さん」

「あんなに毎日仕事で動き回ってるのに、痩せねーんだよな、林田さん」

居ないとは言え、小太りの林田に対し失礼な発言をする三人である。

林田は、『ひまなバンド・ホーサイレイ』と『最近売れてきているデュオグループ・ウトンブレ』の二組を掛け持ちマネージャーとして仕切っているが、四日前、加山の言付けでスタッフルームの蛍光灯を換えようと、脚立の一番上に立ち、バランスを崩し、持っていた蛍光灯とともに落下した。

その際、先に両手を床につけてしまい、その衝撃で鎖骨を骨折、握っていた蛍光灯が割れ、両掌に傷をおい、現在入院中である。

人気急上昇の「ウトンブレ」は、マネージャー無しというわけにもいかず、別のマネージャーが代理をしているが、「暇なホーサイレイ」は代理マネージャーを付ける必要もないのだが、今回は事情があり夏木瑛美が雇われた。

「でもさ、夏木って子、きれいだよな。モデルみたいだった」一行が、にんまりした。
「あのな、綺麗な女ほど高飛車で偉そうなんだよ。一行、女見る目無しだな」知成が、顎を上に上げ冷たい視線を向けた。
「女のマネージャーって、ヤリづらくね？　若いしさ。俺ら、ずっと林田さんだったじゃん？」玲二が言った。
「まっ、林田さんが戻って来るまでだし、おれたちそんなに仕事入ってないから大丈夫なんじゃない？　うん！」一行は一人うなづいた。
一行の言うように、ホーサイレイのスケジュール表は「白い」。あぶり出し方法でスケジュール表をあぶってみても、文字などは出て来ない。
一枚のコピー用紙内で、月間スケジュールではなく、年間スケジュールが収まる。
「事務所の紙を無駄に使わない、経費削減、吉田プロに貢献、それがホーサイレイ！」などと本人達は、言っているが、それ以上に事務所経費で食事をしている。
しかし、それは今までの話だ。

三十分ほど経ち、瑛美がピザとフライドチキン諸々を持って、応接室に入って来た。
「みなさん、何か飲みますか？　コーヒーとか紅茶とか」瑛美に訊かれた。
「じゃ、俺、コーヒー」
「おれも！」
一行と玲二が言い、瑛美が知成に顔を向けると「オレ、コーラー！！」知成が元気に言った。
「コーヒー、とか、紅茶、とか！」

瑛美が少し大きめの声を出し、もう一度訊いたが、
「……オレ、コーラァァアアア」
知成が負けじと答えると、瑛美は何も言わず出て行った。
「なんじゃっ、あの女は。おとなしくコーラー持って来いってんだよ」
知成はムッとした表情で、ブチブチいいながらピザの箱を開いた。

再び瑛美が現れ、一行と玲二の前にはコーヒーが置かれ、二人が礼を言うと瑛美は「どういたしまして」と、初めて微笑んだ。
その美しい笑顔に少々戸惑う、一行と玲二。
だが、知成は「どうぞ」と目の前に置かれたマグカップを覗き込み、ピザを食べる手を止めた。
カップの中には透明の液体が入っている。
「……な、に…、これ…」瑛美を見上げながら訊いた。

「お湯」無表情のまま一言返ってきた。
「…オレ、お湯なんて言ってないぜ？　コーラって言ったんだぜ？」
知成は、ムッとした声を出した。
「給湯室にコーラなんてないですから」
「ないんなら買ってこいよ」
「誰が！？」
瑛美のドスの効いた声で怒鳴られ、一瞬、三人はビクッとした。

「……おまえ、買って来いよ」
「どうして！？」
「……オ、オレ、コーラ飲みてーから」
少しドモリながら、知成は反抗的に言ってみたが、「はんっ」と、瑛美が、呆れた笑いにも似た声をだした。
「あなたさぁ、そんなに飲みたいんなら、自分で買ってくれれば？」

「ぁあ！？　おまえ、マネージャーだろ？　買って来いよ！　ピザにはコーラって相場が決まってんだよ！」
「あはは～、あなた、バッカじゃないの？　ピザにコーラなんて、悪玉菌貯め込んでどうすんのよ。お湯で充分よ！　おゆ、おゆ、おゆー」瑛美は知成を見下げて言った。
一行と玲二は、瑛美にビビりながら二人の会話を見守った。

「テメー、人に向かってバカと言ってんじゃねーぞ！　生意気なんだよ！」
ムカつきが頂点に達した知成はソファから立ち上がり言ってはみたものの、
「あなたさぁ、子供じゃないんだから。わがままもほどほどにしときなさい。暖かいお湯でも飲んでお腹の中に入ったチーズ溶かしておきなさい」
「……」
全く怯まず、わけのわからない事を瑛美に言われた知成は、何も言えなくなった。

「じゃ！　失礼しまーす」
涼しい顔で出て行こうとした瑛美の背中に向かって、我に帰った知成が怒鳴った。
「おい！　待てよ！　オレ、あなたっていう名前じゃねーんだよ！！」
「あぁ、ごめんごめん。ちせい」
「…え？」知成が聞き返した。

「ん？　んーと、しせい？」瑛美が言いなおした。
「ぁあ？」
「なによ、名前呼べって言って名前呼んだんだから、返事くらいすればぁ？」

瑛美が怪訝な顔をすると、知成も怪訝な顔つきになった。
「しせい、とか、ちせいってなんだよ。英知の「知」と成功の「成」って書いて『ともなり』だよ！」
「あっ、そう…。意味わかんないけど、ともなりって読むんだ…」
瑛美は、ホーサイレイの資料を見せてもらっていたが、メンバーの名前のところにふりがなは、ふっていなかった。

アメリカで生まれ育ち、二十歳の時に日本に来た瑛美にとって漢字は苦手だ。
「知成」を「ちせい」とそのまま素直に読んでいた。

瑛美は玲二にたずねた。
「えっ、じゃぁ、れいじは？」
「ん？　俺は、れいじであってるよ」
「そう」

「じゃ、」と、一行に顔を向け瑛美は訊いた。
「じゃ、いちぎょうは、いちぎょう？」
「へっ？」
一行は、知成と玲二と顔を見合わせた。
「いえ、おれは、一行と書いて、かずゆきと読みます」
なぜか敬語を使う一行である。

「ふ～ん、えっと？　ともなりに、れいじに、かずゆき…ね？　あ、そうそう、私も『おまえ』じゃなくて『エイミ』だから。わかった？」
瑛美は一人ずつ指さし確認をし、知成に言い、納得した顔で部屋を出て行った。

「あいつ、もしかして、スゲー頭悪いやつ？」
「なんかこの先、不安」
「林田さ～ん、カンバ～ク」
三人は、夏木瑛美は大丈夫なのか心配そうな顔で瑛美が出て行ったドアを見つめた。

（三）三人と一人（3）

ピザを食べ終わり、仕事もなく、帰るわけでもなく、ソファでくつろぎ、くだらない話をしながら三人は応接室でなごんでいた。
ドアノックの音に三人がドアに顔を向けると、吉田プロ音楽部の先輩バンドで、安定した人気を保っている「ゴーディオン」のボーカル・悠・三十一歳が、顔を出した。

「よっ、元気か？　おまえら！」
「うぉっ！　悠さん、お久しぶりです！」三人は立ち上がり、頭を下げた。
よく食事をごちそうになっている三人だが、全国ツアー中で忙しい身の悠に会うのは、久しぶりだった。

「どうしたんですか？　今日は」一行が訊いた。
「うん、社長に用があって。そうだ、誰か一人でいいからスタッフルームに来るようにって、瑛美に伝言頼まれたんだけど。あいつ今日からだったんだな、吉田プロ」
「ぇえ！？　悠さんにそんなこと頼んだんですか、あいつ！　自分が来ればいいだろうーが！」
知成が怒り、「文句言いついでにオレが行って来る」と応接室を出た。

「悠さんって、彼女と…瑛美と知り合いなんですか？」
知成が出て行ったあと、玲二が不思議に思い訊いた。
「ん、まぁな。あいつ、マネージャーとかの仕事は初めてだけど、仕事はできるヤツだから、大丈夫だよ。それ見込んで社長も林田さんも、彼女にまかせたんだから」
「そうなんですか？　でもなんか、漢字とか読めないみたいだし。

おれなんて“いちぎょう”なんて呼ばれちゃって…」
一行の言葉に、悠が笑った。
「あはは、しょうがないよ。瑛美はアメリカ育ちだから。漢字はあまり勉強してないらしいよ」

悠は、玲二と一行の二人に瑛美のことをいろいろと話したが、そんな会話にも加わらず、何も知らされずに知成はスタッフルームに行き、瑛美の座っている机の横に立った。
が、呼んでおいた瑛美本人は電話中だ。

知成に気がつくと、瑛美は、声は出さず、手の平を知成の顔の前に突き出し、電話の向こうの人と話を続けている。

（ム、ムカつく！）
「オレは犬じゃねーぞ！」と、口パクで瑛美に向かって訴えてみるが、完全に無視された。
ふくれっ面になる知成だが、電話の邪魔をするほど子供ではないので、となりの席に座り、瑛美の電話が終わるのを大人しく待った。

（早く終わらせろよ、電話。まったく！）
知成は、机に頬づえをつき、念を送りながら受話器を握る瑛美の横顔を眺めていた。
（……こいつ、マジ綺麗な顔してんなぁ。まつ毛、結構長いじゃん。吉田プロのタレントより綺麗だよなぁ……つーか、そんなことはどうでもいい！つーか、こいつ、なに、プロ並みに仕事してんの？）

瑛美は、電話の相手と対等に話をしている。
言葉淡々と相手に有無を言わさないように、かと言って捲し立てるわけでもなく、落ち着いた話し方で何かを交渉し、相手に「イエ

ス」と言わせてしまいそうな感じであった。

（……こいつ、彼氏…いんのか？）

知成は、瑛美の顔を見ながらまた考えが変な方向に行ってしまっていた。

（……何考えてんだ！　オレは……。オレの馬鹿！）

知成が自分で自分を叱咤していると、受話器を持ったままの瑛美が急に横を向き、目と目が合うと、カァっと、自分の顔が赤くなるのがわかり、知成はおもわず目を反らしてしまった。

十分ほど待たされ、電話が終わり、瑛美が知成の顔を見て首をかしげ言った。

「で、知成、何か用？」

「うっ…はぁ？　おまえが来いって言ったんだろ！」

「あっ、そうそう、悠ちゃんに頼んだんだ、私」

瑛美は、すっとぼけた顔で言った。

「ゆ、悠ちゃんって、おまえ、悠さんのこと何『ちゃん』付けで呼んでんだよ！」

目を丸くし、知成は言ったが、瑛美は平然と言い返した。

「そんな他人行儀な。悠ちゃんでいいじゃない？」

「他人行儀って、おまえら他人じゃねーのかよ！」

「え！　他人に決まってるじゃない。やらし～、なに考えてるの？知成」

「……わけわかんねーし、話になんねーし…。つーか、オレに何の用なんだよ！」

本題を思い出した瑛美は、机の上の紙を知成に渡した。

知成は目を通し、瑛美を見て不思議な顔をした。

「何、これ……」
「ホーサイレイの向こう三ヶ月のスケジュール。明日から頑張ってね！」
にっこり微笑む瑛美がいる。

吉田と林田は、「ホーサイレイをこのまま野放しにしておくのはいけない」と心を改め、取れる仕事は取り、スケジュールを作っている矢先、林田が怪我をしてしまった。
まだ空いているスケジュールの白い部分は、瑛美が仕事を取り、埋めている最中だ。
先ほどの電話交渉も雑誌関係者へのものだった。

「どうしてオレたち、こんなに仕事が入ってんの？」
知成が、うんざりな表情をした。
「こんなに…って、まだ余白だらけじゃない。そのうち、ここも埋まる予定だから勝手に自分たちの都合とか入れないでよね。仕事優先で行くんだから」
「待てよ。オレたちの自由な時間は？」
「あるわけないじゃない。何寝ぼけたこと言ってんの？　今までただ飯食べさせてもらってきて。少しは事務所やレーベルに恩返ししなさいよね！」と、瑛美は真剣な顔つきで言った。

今まで見たことのない「詰まっているスケジュール表」を眺め、知成はゴクンと唾を飲み込んだ。
「瑛美ちゃん、ＬＴＶ局の小沢さんから電話～、３番ね」
「は～い」
デンジャラス佳代が瑛美に、電話を回した。

「知成？　何ボケってんの？　そのスケジュール表みんなにも見せてきて」と、瑛美は知成に言い、電話の受話器を上げた。

「もしもし、夏木です。で、小沢さん、どうなの？　ホント！？Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！　もー小沢さん大好き！」
電話中の瑛美の声など入らず、知成がメンバーのところに戻ろうと、立ち上がると、瑛美は知成の持っていたスケジュール表とパッと取り上げ、余白に新たに書き込みをした。
『ＬＴＶきょく、こんばんてん、１１じ入』
漢字の苦手な瑛美が作るスケジュールはひらがなが多い。
そしてまたスケジュール表を知成に渡し、メンバーのところに行くように手で合図し、電話の小沢と話し始めた。

知成は書き入れられた文字を見直した。
「こんばんてん？　今、バン、天ーーーー！？」
頭の上で大きな声を出した知成にびっくりした瑛美は、知成を見上げたが、知成は知成で慌ててスタッフルームを出て行った。

メンバーのいる応接室のドアを思い切り開けた知成は、叫んだ。
「こ、こ、こんばんてん！どーしよう！こんばんてんだよ！」
一行と玲二、そして、まだ話しこんでいた悠が、何事かと知成を見た。
「どうしたんだよ、知成。いきなりなんの雄叫びだよ」玲二が訊いた。
「出れる…こんばんてんに出れる…こんばんてん…」
「こんばんてんって、『今夜だけＢＡＮＤ天国』のこと？」
悠が優しげな顔をして訊くと、知成が深いうなずきを三度ほど繰り返した。

『今夜だけＢＡＮＤ天国』とは、音楽ジャンル問わず、バンドのみが出演する音楽番組で季節の変わり目、年三回スペシャル番組と

して放送されている十数年続いている番組で、良い視聴率をとっている。
新人バンドやメジャーでないバンドにとっては憧れのプログラムであり、悠のバンド「ゴーディオン」は、もちろん常連だ。

「マジかよ！」
「なんでおれたち出れるの！？」
「わかんねーけど、出れる！」
三人の声は震えながらも喜んでいた。
仕事に無頓着であるように見えるホーサイレイだが、やはりバンドメインの番組に出演できるということは、何よりも嬉しい。

「悠さんたちも出演するんですよね！？」
「うん、スケジュール入ってるよ。初めてだね、一緒に出演するのって」
悠も一緒に喜んだ。

「ねぇねぇ、ところでさぁ、この紙な～に？なんか文字がたくさん書いてある…」
スケジュール表を見ていた一行が知成に訊いた。
知成が、瑛美に言われたことを二人に説明すると、一気にテンションが下がり、自分たちの自由時間が無くなることに肩を落した。

「おまえらさぁ、たまには働けよぉ……」
三人の様子を見ていた悠が、苦笑いのまま言った。

（四）瑛美、初現場

瑛美がマネージャー代理になった翌日、午前十一時からラジオ生放送ゲスト出演の仕事がホーサイレイを待っていた。
林田が取り付けてきたもので、ホーサイレイにとって午前中の仕事は三年ぶりだ。
朝を苦手とする彼らは、ラジオの仕事はいつも午後の収録か夜の番組が多かったが、もう、わがままは許されない。といっても、ラジオ自体、三ヶ月振りの出演だ。

「九時半に迎えに行く」と、前日、瑛美は三人に言っておいた。
一行の住むマンションに着き、チャイムを鳴らした。
ドアを開けてくれたのは、長い髪を金色に近い色に染めたノーメイクつぶらな瞳の若い女性だった。
瑛美は挨拶をし、一行を迎えに来た旨を伝えると、「いつもお世話になっております」と、女性は、丁寧に頭を下げた。
玄関の前で待っていると、のそのそと眠そうな顔の一行がやって来た。
「もう、何やってるの！　早くしてよぉ！　マネージャーさんに迷惑かかるでしょ！」女性が急かすように一行に言うと、ふわぁ～と、一つ大きなあくびして「うん、いってきます…」とぼそぼそと言い、瑛美のあとに着いた。

車に乗り込み、玲二と知成が二人で住んでいるマンションに向かう中、瑛美が一行に訊いた。
「彼女なの？　あの女性」
「あぁ、美也子っていうんだ。付き合って二年くらい」
「そう、彼女、まだ若いんでしょ？」

「二十一…」
薄い給料のホーサイレイ。一人で生活も大変だろう…彼女を養えるわけもない。
だけど、結構良いマンションに住んでいた。
「ねぇ、生活どうしているの？　もしかして、彼女に養ってもらってるとか？」
「うん、おれ給料少ないし、彼女は水商売してる」
「そう」
「こんなおれでも良いのか？って聞いたら、良いっていうから…一緒に住んでる」
「そう…ふふ」瑛美はハンドルを握りながら微笑んだ。
「なに？　その笑いは」
「ん～？　じゃ、彼女のためにもこれからは頑張ってお仕事しましょうねぇ。スケジュール表真っ黒にしてあげるから！」
「……少し加減してね…。あと午前中とか止めてね」
一行のそんなわがままなお願いが、許されるわけが無い。

一行に道案内をしてもらいながら、車は玲二たちのマンション前に着いた。
「ええー！　なんか凄い豪華なマンションなんですけど？」
瑛美は、二十階建てのエントランスロビー付きの高級マンションに驚いた。
「このマンション、玲二が親父に買ってもらったんだ。あいつの家、金持ちだから。おれも一緒に住んでたんだけど、彼女できたからさ、ここ出たんだ」
「ふ～ん。っていうか、あの二人の姿が全然見えないんですけど？」
マンションエントランスで待つように伝えてあったが、いない。
瑛美が携帯を出し、玲二にかけたが繋がらない。
知成にもかけたが全く出ない。

「まだ寝てんじゃないの？」
一行ののん気な言葉に瑛美は、「ちょっと見てくる！」と、持っている合鍵を握り締め、急いでフラットに向かった。

知らされている暗証番号を押し、エントランスに入り、１２階でエレベーターをおり、フラットのチャイムを鳴らした。
反応がない。
合鍵でドアを開けると、静まり返っている。

寝室がどこかわからず適当にドアを開けたが、反対側のリビングと続きになっているキッチンの扉であった。
「キ、キッチンが、う、うちの畳部屋より広い…」
気を取り直し、他のドアを開けていくと、キングサイズのベットが置いてある部屋にたどり着いた。

「あっ……、そ、そうだったの…あなたたち。…そんなことより、起さなきゃ」
大きなベットの真ん中で、パンツは穿いているが裸の玲二と知成が並んで寝ていた。
瑛美は少しの勘違いをしたが、そんなことより仕事が一番なので、二人を叩き起した。
二人が、ちゃんと目を覚ますまでに十分ほどかかった。
瑛美の息は切れている。
「つ、つかれた…」

時間もないのに、シャワーを浴びたいと言い出し、二人で風呂場に行ってしまった。
「お風呂も二人一緒かよ…」
リビングのソファに腰を下ろした瑛美はボソっとツッコミを入れ

た。

シャワーから出てきて、すっかり目が覚めた二人は、支度を始めるが、知成は、ちんたらちんたらと動きが遅い。
「あのさ、もっとパッパッパァーーッと、できないの!?　ラジオなんだから服なんてなんでもいいのよ!」イラつく瑛美が、怒鳴った。
「朝からうるせーなぁ。身だしなみは大切だろ?」
「だったら、もっと早く起きて、私が迎えに来たら、すぐに出かけられるようにしときなさいよね!」
「じゃぁ朝からの仕事入れんなよな!　朝弱いんだよ、オレ…」
「朝って、今何時よ、十時過ぎてるのよ!　世間のみなさまはすでに活動してんの!」

瑛美と知成のやり取りを、支度を終えた玲二は、タバコを吸いながら見ていた。
「あっ、玲二!　タバコ止めなさい!」
「え?　なんで、なんで!?」急に矛先が自分に向いた玲二は、少し体に筋肉に力が入り、おどおどしてしまった。
「体に悪いでしょ!　タバコ代もバカにならないんだから!」
「ぇ……、そんなぁ、俺の心の拠所のひとつを…」
玲二のタバコを取り上げ、灰皿に押しつぶしていると、知成が洗面所のある方の廊下のドアを開けようとしていた。

「あーもぅ!　知成っ!　どこ行くのっ!　玄関はそっちじゃないでしょ!」
「髪の毛セットしに、」
「セットなんてしてもしなくてもどっちみちイケてないんだから、そんなもんしなくていいの!!　時間がないの!」
瑛美は知成と一行の手を掴み、玄関を出た。

二人を車に押し込むように乗せ、運転席に座った瑛美は、鞄の中からバナナを取り出し、知成と玲二に手渡した。
「はい！　これ食べて。朝ごはん」
「オレ、おさるさんじゃないし…」
「文句言わない！　バナナパワーの凄さを侮るでない！」
瑛美は、一喝し、エンジンキーをまわした。

「あれ？　おまえ、食わないの？」
知成に訊かれた一行は、「すでに食べさせられた…。元気が出ました…」
と、助手席でまっすぐ前を見て言った。

ラジオ局に着いたのは放送開始八分前だったが、完全に遅刻だ。打ち合わせもちゃんとできないまま生放送は始まり、関係者に平謝りの瑛美は横目で、ホーサイレイの三人が、ちゃんとＤＪからの受け答えをこなしていることを確認し、ホッとした。

ブース外の椅子に座り、番組が終わるのを待っている瑛美の横に、製作ディレクターの西村が座った。
「夏木、朝からお疲れだな」
「あっ、西村さん、ホントすみません。二度とこのようなことは無いようにしますので、次もよろしくお願いします！」
瑛美は立ち上がり頭を下げた。

「おいおい、時間には間に合ったんだから、今日は大目に見るよ。おまえに頭下げられるとは思わなかった」
「だってしょうがないじゃな～い。マネージャーだし、林田さんの

取ってきた仕事に穴あけたら、私、ほんとうに吉田プロ戻れないよ…」
ため口に戻り、肩を落とし、ストンと椅子に座った瑛美に、西村は笑った。

「でも夏木がこの業界でマネージャーねぇ、あはは、笑える」
「まっね～、林田さんの代理だけどね。林田さんもホーサイレイ五年目にして本腰入れて、いざ！っていうときにさぁ、…志半ばであんなことになってしまって…うっ」
瑛美が目頭を押えた。
「おいおい、おまえ、その日本語おかしいから、止めろ。林田さん死んで無いから…」西村は苦笑いだ。

ホーサイレイの曲がかかっている間、ＤＪブースの中の知成がガラス越しの瑛美をチラッと見た。
（えっ、泣いてる？　瑛美…）
西村ディレクターの横で目頭を押えている場面を見てしまった。
（怒られてんのか……。オレたちの所為…？）
西村に怒られているわけではないが、局にギリギリ着いたのは「オレたち」の所為ではなく「オレ」の所為である。
そんなことには全く気づかず、知成は、瑛美を心配した。

一時間の生放送は無事終わり、ブースから出てきた三人を瑛美は笑顔で迎えた。
そんな瑛美を見て（無理に笑ってるんだ…）と、知成の勘違いは増した。

（五）小野山登場

「瑛美。ごめん…、次からは朝早い仕事のときは、ちゃんと起きて瑛美が迎えにくるのまっているよ」
ラジオ局で見た瑛美の涙に反省をした知成は、あの日、帰りの車の中で瑛美に言った。
……言ったはずであるが…

「ちょっとーーー！！　知成！！　起きなさいっっっ！」
ベッドに埋もれている知成を瑛美は必死に叩き起してはみるものの、一向に起きる気配は無い。
午前中の仕事は、音楽雑誌のインタビュー。
ホテルのロビーラウンジで編集者と約束をしてある。
時間には少し余裕を持って迎えに来たが、このままではどうにもならない。
玲二も知成を起そうと何度も試みたが諦め、瑛美に託し、車の中で一行と後部席に並んでバナナを食していた。

昨晩、ミュージシャン仲間に浴びるように酒を飲まされた知成は、「う～ん、おきる…」と返事はするが目が開かず、その返事も意識ないまま答えているものだった。

「どうしよう…本当に起きない」

瑛美は、知成の体を揺すった。
「知成…？知成…、林田さんが…林田さんがぁぁぁぁぁぁぁ」
大声で叫んだ瑛美がそこまで言うと、知成の目がパッと開き、体を起こし声を上げた。
「えぇぇぇ！？　林田さんがっ！？　死んだぁ！？」

「……」
「どうしてっ！　なんでっ！？　いつっ！？」
知成は瑛美の両腕を力いっぱい掴み揺さぶった。
「…誰も林田さんが死んだなんて一言も言ってないわよ？　やーね、勝手に人殺しちゃって。知成ってサイテ～」
過去に何度か自分も林田を無い人にしている瑛美ではあるが、蔑んだ目で知成を見つめた。
「…なんだよ、まぎらわしいな。おまえが「林田さんがぁぁああ」なんて叫ぶからだろ！」
「はぁ？　私の所為ですか？　へーへーそうですか。そんなことより早く起きなさいよね。みんな車で待機してるわよ」
瑛美はせかすように知成の腕をひっぱり、ベッドから引きずり出した。
「で？　林田さんがどうしたんだよ。林田さんになにかあったら困るよ、俺たち」知成は、少し心配そうな顔で訊いた。
「ん？　別に…？　林田さんは今日も元気に病室のベッドに固定されているはずよ。今朝林田さんの奥さんから「今日も元気に仕事をするように」って代理メールが入ってたよ、って言おうと思ったの。それなのに知成、勝手に…」
瑛美はクスクス笑い、そう言った。
「…マジに林田さんがいなくなったら、俺たちホーサイレイは、どうしたらいいかわかんなくなっちゃうよ…。ずっと一緒にいて面倒みてくれてて、いなくなったら…困る」
真顔でそう言った知成に、彼らに慕われている林田を羨ましく思い、口角を少しだけ上げて瑛美は微笑んだ。
そして、ウソでも今後、林田を仏にするのは止めようと誓った。

午前中の雑誌インタビューのあと、『歌のリラックス』という数組の歌手と共演、トーク番組収録のためＬＴＶ局に入った。

「なんかテレビ局って、ものすごく久しぶりな気がする」玲二がうれしそうに言った。
地方のローカルテレビには何度か出演しているが、大きなテレビ局のゴールデン番組出演は四年ぶりである。
楽屋に向う途中、番組プロデューサーの小沢を見つけた瑛美は、彼に駆け寄り「小沢さ～ん。無理言ってごめんなさい」と、両手を合わせ頭を下げた。
「いいよ、大丈夫だよ。小野山のお願いでもあるしな。ホーサイレイが売れたら、今度はこっちから出演依頼しなきゃならないし。そうなることを願ってるよ」
と、小沢は言い、瑛美の頭をポンポンと軽く叩いた。
瑛美はホーサイレイの三人にも小沢に挨拶をさせ、その場を離れた。

「瑛美って、顔広くね？」
三人の疑問だった。
瑛美は、行く先々の仕事場で男女問わず、必ず顔見知りと会い、挨拶をする。
それは仕事の付き合いとかではなく、プライベートでも仲良くしている雰囲気だった。

瑛美は三人の疑問に、「前の仕事が同じ業界だったから知り合いも多い」と、軽く答えたあと、早く楽屋に行って支度するように急かした。

「うおー、俺たちの名前だ！」
クローク室の横に『ホーサイレイ様』と張られている紙を見て玲二は感激し、一行は携帯で写真を撮ったりと無邪気に喜んだ。

順番に部屋に入り、最後に瑛美が入ろうとすると、廊下の少し先で瑛美の名前を呼ぶ声がし、ドアから顔を出し、声のする方を見た。

「あー、小野山ちゃ～～ん」

瑛美は、そのまま小野山の所に駆け寄り、抱きついた。

その様子を知成はドアから頭だけを出して見ていた。

（ええ！？　抱き合って…いる…それもしっかりと！）

今まで見た事のない瑛美の嬉しそうな笑顔に少しムッとしたことに、知成自身は気が付いていなかった。

「小野山ちゃん、わがまま聞いてくれてありがとう。さっき、小沢さんにもお礼言っといた」

「大切な瑛美のお願いだから聞かないわけにはいかないだろ？」

小野山は瑛美のおでこにキスをした。

（ぁあ！？　おでことは言えキス！？　それになんなんだあの密着度、ここはテレビ局だぞ！）

知成は一人ブツブツとつぶやき、眉間にしわを寄せ、二人を観察した。

「なにやってんだよ、知成。着替えろよ、メークもしなきゃなんないし、出演者の人たちにも挨拶行かなきゃなんねーんだぞ」

「ん、わかってる…」

玲二に言われ、知成はもう一度二人の様子を見てから部屋の中に入った。

（誰なんだ、あの男…）

小野山は『歌のリラックス』のディレクター。

「近いうち、出演すれば必ず視聴率を稼げるホーサイレイになるから、今のうちに使っておいたほうが良い！」と、確信はないが大法螺を吹き、ホーサイレイの出演をプロデューサーの小沢に口をきい

てほしいと、瑛美が小野山に頼み込んでいた。

瑛美が部屋に戻ると、知成が瑛美の近くに来てボソッと訊いた。

「あの人…男の人、誰…？」

「男？」

「今、廊下で」

「あぁ、小野山ちゃん？　歌のリラックスのディレクター。知成たちにも紹介しとけばよかったね。まっ、スタジオで会うからその時ね～」

（ディレクターと抱き合って、キス！？　どういう関係なんだ）

知成は頭をかきながら、首を横に倒し、瑛美を見た。

（六）吉田と林田、喜ぶ

ホーサイレイがラジオや『歌のリラックス』などメディアにちょくちょく出るようになると、新しいファンがつき始めた。
デビュー当時からのファンの人たちが作っている私設だが吉田プロ公認のホーサイレイファンクラブ「マンマンデェ」の会員が増えた。
１５８人だった会員数が４５０人になったと、ファンクラブ会長から連絡がきた。
二ヶ月前にリリースしたシングルＣＤも最初一万枚にも満たなかったものが、四万枚も売れ、過去のＣＤも徐々にだが、売れ始めていた。

この情況を林田に報告しに行った吉田社長は、病室で林田と共にうれし涙を流した。
「あいつらもやればできるじゃないですか、社長！」
「だよな、だよな。うんうん。夏木も頑張ってるよ、林田くんの遺言を受け継いで一生懸命だ」
「……いやいや、社長、僕、死んでませんし、今のところ、死ぬ予定もないんですけど！」林田は真顔で返した。
「……だよな、だよな。んがははは～。わるいわるい。でもうれしいなぁ。あいつらも自分たちの歌を多くの人に聴いてもらえる喜びを、最近感じてきてるみたいだしな」
吉田は、自分で持ってきた見舞いのマスクメロンを勝手に切り、食べながら言った。
「やはり、僕がもっと早くにあいつらのやる気を見出してやっていれば…。反省してます」
体を動かせず、寝たままそう言った林田の口に吉田は、一口大に

カットしたメロンを放り込んだ。
「ほ、ふみまへん（あっ、すみません）」

「何も林田くんが反省することないよ。もっと早くにとか、もっとあとにとか、そんなもんは関係ない。何事にも時期というものがある。ホーサイレイは、その時期っていうやつが今やってきたんだよ。それに、あいつらは林田くんに頼りきっている、見てるとわかる」
「社長…」飲みこんだメロンが涙で少ししょっぱい林田である。
「あいつらが、この五年間の間に辞めたいって言ってこなかったことは、ありがたいな。ぼくは、吉田プロダクションに所属する人間…、タレントだけじゃないぞ、マネージャーやスタッフみんなもだ、全員が楽しく毎日を過ごしてくれることが、ぼくの一番の喜びだ。だが、あんだけ長い間、ただ飯食ってるやつらは、あいつらだけだが、な。あはははは～」
「社長―。僕は一生、吉田プロに付いて行きます！　あいつらの面倒も見ます！」
林田の目から涙がこぼれた。が、体固定のため拭うことができず、流れっぱなしだ。
「あはは～、頼んだぞ！　林田くん！！」
林田の涙に吉田もまた笑いながら泣き、寝ている林田の胸元をバンバンとおもいきり叩いた。
「うっぎょーーーー」
「あっ……」
林田の嬉し涙は、苦痛の涙に変わり、退院が少し延びてしまった。

（七）知成はじめてのお使い

「加山さ～ん、お腹減ったぁ」
スタッフルームに顔を出した知成が言った。
「……あんたたちは、もぉ」加山が鼻で笑った。
忙しくなってからの久しぶりのオフ日であるにもかかわらず、三人は事務所に集まり、ご飯をねだる。
「じゃ、出前を取ってあげる代わりにちょっとお願いしてもいいかしら？」
そう言った加山に知成が、「いいよ、なに？」と、軽く返事をした。

「ご飯食べてからでいいから、この書類を瑛美の家まで届けてくれる？　さっきから携帯鳴らしてるんだけど、出ないのよ。役所の書類なんだけど、今日中に渡したいの」
「瑛美の家？」
「そう、ここからそんなに遠くないから。事務所の車使っていいから、お願いできる？」
加山のお願いだ、いやとは言えない。言えるわけが無い。
知成は、出前との交換条件を呑んだ。

応接室に戻り、玲二と一行に「一緒に瑛美の家に行こう！」と提案したが、
「条件呑んできたのは知成なんだから、おまえが一人で行け」と、めんどくさいことはお断りの二人に言われ、知成は出前を食べたあと、加山に描いてもらった地図をたよりに、一人淋しく瑛美の家まで車を走らせた。
「ここか？」

地図と同じ場所にあったのは壊れそうなボロアパートだった。
知成は車を停める場所を探した。
アパートから少し先に、木造平屋のこれまたボロい一軒屋があり、垣根も無い庭先に少しくぼんだスペースがあった。
「ここら辺、高級住宅街なのにボロい家多くね？あっ、ここに車おいちゃおうかなぁ～」
ずうずうしい性格である。

都会の住宅街では珍しく、その平屋には縁側があり、おじいさんがボケーっと座っている。
「あのじいさんボケてそうだし、まっ、いっか」
知成は勝手に車を寄せ、おじいさんに声をかけた。
「おじいちゃん、ちょっとだけここに車置いていい？　すぐ戻ってくるから」
「……」
おじいさんは知成を睨んでいるが何も言わない。
耳が遠いと思った知成は腹の底から声を出し、おじいさんに、もう一度言った。
「じーちゃん！　聞こえる！？　ここにぃ、くるまをぉ、置いて、」
「うるさい！　そんな大きな声を出さんでも聞こえとるわい！　ばかたれが！」間髪入れず怒られた。
「なんだよ、聞こえてんなら返事くらいしてよ、じーちゃん」
「わしは、爺さんではない！　ばかたれが！」
ブツブツ怒るおじいさんだが、どこから見ても爺さんだ。

知成は困ったが気を取り直し「じゃぁ、おじさん…」と話しかけたが、
「わしはおじさんでもない」と、返された。
「くぁー。じゃぁ、なんだよ！」
「国次郎なので、国ちゃんと呼べ」

「……（やっぱ、このじいさんボケてる）」

「じゃぁ、国ちゃん！　少しだけここに車を置いていいですか？」
「いいよ～」と、ものすごく軽く返事をくれた。
「オレ、あそこのボロッボロのアパートにちょっと行って、すぐ戻ってくるから」
「どこのアパートだって？」
「あれだよ、あのボロッボロの建物んとこ」

知成が指をさした方向を見て、国次郎は訊いた。
「あのボロッボロのアパートになんの用じゃ？　彼女でも住んでいるのか？」
「彼女？　あぁ、まぁね。とにかくすぐ戻るから、車見てて」
ずうずうしい知成は、国次郎に車の見張り番をさせ、アパートに向かい、国次郎は、封筒片手に走って行く知成の姿を目で追い、アパートに入るのを見届けた。

「今時珍しい造りの建物だよなぁ」
知成はアパートに一歩足を踏み入れ、一眺めした。
建物真ん中にある玄関を入ると、二階まで吹き抜けの高い天井、両左右に部屋が並んでいた。
中の床は板張りになっており、時折ギシギシと板がきしむ音がする。
内階段を上り、二階の一番奥にある瑛美の部屋に向かった。
チャイムも付いていない。

知成がドアをノックをすると、「はーい」とドア向こうから聞こえてきたのは、男の声だった。
（男？　部屋間違えたか？　オレ）

カチャっとドアノブが回り、二十代後半くらいの男が出てきた。
（オレより、か、か、かっこいい…）
知成は、長身で格好良い男に見惚れてしまった。

「なにか…？　新聞とかなら結構ですが」
そう言われ、我に返った。
「あ、いえ、この部屋は夏木さんのお宅では、」
「はい、夏木ですが…」
「瑛美…さんに」
「あぁ、瑛美の友達？　瑛美、今スポーツジムに行ってる。五時前には戻ると思うけど、入って待つ？」
そう訊かれた知成は、少々あせり、封筒を差し出した。
「いえ、これ渡しに来ただけですので。あっ、瑛美さんが働いている会社の加山さんからって、言ってもらえればわかると思います」
「あっ、加山さんから？　で、君は？」
「オレは、えーと、瑛美さんの同僚？…です。ということで、それ渡しておいてください。では、失礼します」と言い、知成は頭を軽く下げ、足早にアパートを出た。

「あー、あせった。男がいるなんて聞ーてねーし。スゲーカッコイイし…、瑛美…何人の男と付き合ってんだよ、小野山ディレクターとは抱き合っちゃってるくせに……、あいつ美人だもんなぁ、モテてもおかしくねーよなぁ……ハァ……」
知成は、溜息まじりの独り言を言いながら、小走りに国次郎のところに戻った。

「坊主、もう彼女との用事は済んだのか？」姿を現した知成に、国次郎が訊いた。

「ん、うん。用事終わった」
「ずいぶん早いなぁ、わしが現役の頃は、体力がありあまって〜」
国次郎早合点である。
「いやいや、国ちゃん、オレそういう用事で行ったんじゃないし…」
「どうしたんじゃい、フラれたか？」
にんやりと笑う国次郎は、知成の顔を覗きこんだ。
「フラれてねーよー」
「そうか、じゃ、茶でも飲んでけ」
国次郎に縁側に座るように言われた知成は、素直に従い、腰を下ろした。

「ところでさぁ、国ちゃん、ここに一人で住んでるの？」
大きな平屋が気になった。
「まぁな。息子たちは近くにいるんだが、ここには国ちゃんが独りで住んでおる」
自分を「国ちゃん」と呼ぶ、国次郎・七十八歳。

「淋しくないの？　それに一人じゃ危ねーし」
「ばかたれ、わしは、まだ老人じゃないわい！」いやいや、老人だ。
「そっか、でも気をつけてよ？　最近悪い人も多いしさぁ、一人暮らしの人狙った詐欺とかあるしさ」
「ははは〜、まだ頭はボケとらんから大丈夫だ。坊主は学生か？」
「社会人だよ。で、坊主じゃなくて、知成って言うんだ」
「知成かぁ、良い名前じゃな」
「ありがとう」
知成はうれしそうな顔でお礼を言った。

三十分ほど世間話をしたあと、知成は「また来るね」と国次郎と約束をし、事務所に戻った。
知成が去り、国次郎は縁側に寝転がった。

「良い子じゃったなぁ、あの坊主」
そして、静かに目を瞑った。

キキキーと、自転車のブレーキ音が国次郎宅前で響いた。
「国、国ちゃん！！　死ぬにはまだ早いよ！！」
体を揺さぶられた国次郎は、ムッとし目を開けた。
「まだ死んどらんわい。おまえさんはすぐわしを殺す」
「あっ、生きてた？　よかった～」
国次郎の前にいたのは、瑛美だ。

「こんなとこで寝ちゃだめだよ。暖かいっていっても風邪引いたら大変。風邪は老人の好敵手ってやつだよ？」
「老人老人というな、小娘。それに好敵手ってなんじゃい、それを言うなら天敵だ。（時々、わけのわからんことを言い出す娘じゃなぁ…）」

「どこ行っとったんじゃ？」
「久しぶりの休みだから、スポーツジムで運動してきた」
「アメリカからデラカッコイイ男が来てるちゅうに、ほったらかしかい」
「デ、デラってなに？」
「すごくとか非常にとかの意味じゃ」
「あ～、デラカッコイイの耕ちゃんさぁ、仕事でしょっちゅう日本来てるから、観光なんて必要ないもん」
瑛美はニッと笑った。

知成は、事務所に戻り、加山にお使い完了を伝えた。

「ありがとね、知成。瑛美いたんだ。どうして携帯出なかったって？」
「ん、瑛美はジムに行ってて居なかった…から、部屋にいた人に渡しといた」
知成の少しつまらなそうに話す顔を加山は、見逃さなかった。
「部屋にいた人…？　あぁ、耕介くんのこと？」
「名前知らないけど……加山さん知ってるの？　その人のこと」
ボソボソと訊く知成に、加山の口元が緩んだ。
「ん。いい男だったでしょ～、ん？」
「まぁね…」
「ふふふ、大丈夫よ、知成の方がカッコイイわよ」
「……加山さんに言われても…」
「はぁああ！？　私に言われてもって！　なんなのよ！　ちょっとー、ちょっとー知成――――！」
加山らしくない声を出してしまった。
知成は、自分の失礼な返し言葉にも気づかず、加山の声も耳に入らず、トボトボとスタッフルームを出て応接室に向かった。

（八）一行と美也子

一行の同棲相手・美也子は出勤前の身支度のためドレッサーの前に座り、鏡越しに一行に言った。
「ホーサイレイが最近売れてきたでしょ？　お店の子たちにも結構話題になってるんだよ」
「ふーん、そうなんだ？」
一行は一行で、ラジオ局に向かうため支度を始めた。

「でも誰にも言ってないよ、私が一行と暮らしてるってこと。バレないようにするから安心してね」美也子は、素直に言った。
「おれ、そんなズルイ男じゃないぜ？　事務所の人たちもみんな知ってるぜ、おれが美也子と住んでること。内緒にしなくてもいいよ」と、一行は美也子の後に立ち、美也子の頭の天辺に、くしをブッ挿した。
「ちょっと、やめてよ。セットが乱れるでしょ！」
美也子の頭は「盛り」だ。

「今までは一行の顔も世間に知れ渡ってないからよかったけど…」
「おれ化粧してるじゃん？　テレビにしろ雑誌にしろ。街歩いててもわかりゃしないって～。瑛美なんて、化粧したホーサイレイ見て、「化粧ってすごいんだね。ずっとメイクしてろ」って感心してたんだぜ」
「きゃはは～」と、楽しそうに笑う美也子に、
「おまえは、したたかな女になるなよ。おれたち、まだ若いかもしれないけど、美也子のことはちゃんと考えてる。おれにだけには甘えろよ、な」
と、やさしく、鏡の中の美也子を見て言うと、美也子はかわいらしく微笑んだ。

が、美也子が真面目な顔になり、「甘えろって、一行の方が私におんぶに抱っこでしょ！？　生活費！！」
「金銭面だけだろ！　おれがおまえに頼ってるのは！」と、一行は偉そうに言った。
男として、一番そこは女に頼ってはいけないような気がするが…。
どうせなら、金銭面を含めて、女を甘えさせてあげた方がいいのではないだろうか……

二人がドレッサーの前で話していると、チャイムが鳴った。
「あっ、瑛美かな？」
一行はまだ支度を終えていない。
「早く支度して、私が玄関に行くから」
美也子に言われ、一行はバタバタとズボンを穿いた。

「は～い」と美也子が言うと「夏木でーす！」とドアの向こうから元気な声が聞こえた。
ドアを開けた美也子が、「こんにちは、一行、今来ますので」と、瑛美に言ったが、瑛美は美也子を見たまま、何も言わず、顔だけが険しくなっていった。
そんな瑛美の様子に美也子は、少し怯えた声で尋ねた。
「……瑛美…さん？　どうかしま、した？」
「……あなた、だれっ？　頭大きい…」
冷たい声で瑛美に言われた美也子は、一歩後ろに下がった。
「へっ？」
「ちょっと！　あなた一行のなんなの！？　…一行、浮気？　あなた一行の浮気相手！？　美也子ちゃんはどこにいるのよ…残念ながら一行にはね、美也子ちゃんというかわいい彼女がいるの。わかってんの、あなた！」
瑛美の勢いに、ぽかんと口を開け、美也子は口をパクパクさせた。
「…ぁの…」

「んぁあ！？　なに！！」
腕を組み、斜に構えたままの瑛美は、美也子に睨みをきかせた。
「わたし…みやこですぅ…」絞り出した声で美也子は答えた。
「…ぇ？　ぇぇえええ？」
瑛美の驚きの声に驚いた美也子は、後へ三歩も退いてしまった。
美也子は、あげは嬢だ。
普段のつぶらな瞳は、化粧で目がパッチリし、いつも下ろしている長い髪は盛り盛りであるがため、普段の美也子とは「象に変身した蟻」くらいの勢いがあった。

「うっそ～ん」
瑛美は両手で口を押さえ、自分の顔を美也子の顔にくっ付けマジマジと美也子を見た。
「あっ、ほんとだ。美也子ちゃんだ」
ようやく気づき、納得したらしい。
「そんなに違いますか？　私…。これから私も出勤なんですぅ」
「うん！　違う！　すごい頭だねぇ～、重そう。それ、自分でセットしたの？」
「はい、いつも自分でするんです。毎日美容院行くとお金かかるし」
「そうなんだぁ。へぇ～、器用だねぇ～」
瑛美は美也子を上下左右前後と回転させながら、観察し、感心しきった。
普段の自分とそんなにも違うのかと、美也子は少し落ち込んだ。
「あっ、今度お店遊びに来てください、六本木だから。源氏名は『牡丹』で～すぅ」と、美也子はピースをした。
「げんじな？　ぼたん？」
瑛美は自分のシャツのボタンを見た。
「ぇ、いえ、えーと、源氏名とは、お店とかで使う名前の意味で、ぼたんは、そのボタンじゃなくて、お花の牡丹！」

「ふ～ん、ぼたんね。わかった、今度ホーサイレイを連れてお店に行く！」
瑛美も美也子に向かってピースをした。
「いぇ～い」

「瑛美、おまたせ～。って、なに二人でピースし合ってるの？」
奥から出てきた一行は二人を交互に見た。
「べつに？　んじゃ、一行、行くよ～」
「はいっ！」
親指を立てクイッと動かした瑛美に素直に従う一行である。

☆☆☆

助手席に座っている一行が瑛美に訊いた。
「もし瑛美の彼氏が、何気なく人気が出てきたミュージシャンでさ、瑛美だったら、彼氏のために自分は彼女だって言うこと隠す？」
「ぇえ？　ぼたんちゃん、何か言ったの？」
「ぼたんちゃん…って。美也子に言われた。みんなにはおれのこと内緒にしてあるから安心しろって」
「まぁ、そんなものじゃないの？　一行のためを思ってのことでしょ？」
と言い、瑛美はチラっと一行を見た。

「一行が美也子ちゃんとの将来を考えているなら、隠す必要はないと思う。仕事も人気も大切だろうけど、そんなものは失っても大大夫。一番失くして心が痛むものは愛」
ハンドルを握りながら、まっすぐ前を見て言った。

「なんか、瑛美って、おれらと同い年なのに、大人だよな、考え方とかさぁ」
「まっね～、あなたたちより人生経験豊富かもね。なんせ、バツ一だから」
「ええ！　結婚してたの？」
　驚いた顔で一行は、瑛美に顔を向けた。

「うん、二十歳で結婚して、二十二で離婚した～あはは」
「そうなんだ…」
「相手は日本人だったから、二十歳の時に日本に来て、結婚して…、で、仕事始めたんだ私」
「仕事？」
「うん、日本でいろいろな人と知り合って楽しかったのもあるけど、仕事が楽しくて、だんなさんのことほったらかして、彼の望むこと何もしてあげなかった。だから、いつの間にか彼に愛想つかされて、さよなら言われた。百パーセント私が悪い。失くして知った一番大切なもの、それは愛であった。でも、その彼とは今でも友達だよ。奥さんとも一緒に食事とか行くし」
「相手の人、再婚したんだ？」
「うん、もうすぐ子供も生まれる。しあわせな二人を見ていると、ジェラシーとかそんなもの感じなくて、私まで笑顔になるよ。良い人ぶってるみたいだろうけど、私の本当の気持ち」
　そう言った笑顔の瑛美に、一行は瑛美の心は嘘ではないと思った。

「だから、」と瑛美が話を続けようとした時、携帯が鳴った。
　耳にかけてあるイヤホーンをオンにした。
「はぁ？　今むかってるわよ！　ちょっと待ってなさいよ！」
　早く来い、と知成からだった。
　極たまに、自分が先にマンションエントランスで待っていると、「オレを待たせるな」と催促の電話をかけてくるわがままな男だ。

「あいつは何様なのよ～」
「知成は知成様らしいよ、あはは」
「ねぇ、美也子ちゃんは、一行にわがまま言ったことある？」
「わがまま？」
「美也子ちゃん、わがまま言わない子でしょ？　年齢の割にはしっかりしてるし」
「うん、おれは美也子を困らすことは多いけど、あいつがおれを困らすようなこと何一つないかも。それが原因でケンカなんてしたこともないし」
一行は、今までを思い出すように話した。

「美也子ちゃん自体、本来わがままな女の子じゃないのかもしれないけど、彼女のわがままでケンカすることも恋愛の中では必要かもよ」
「え？…」
「だから、美也子ちゃんが一行のことで、いろいろと我慢しないように、時には「だだ」を捏ねさせてあげられる関係を作りなよ。あっ、でもあんまりわがままな女になると、私みたいになる可能性があるけど？」
「瑛美みたいに？　あー、それ一番困るよ」

そんな話をしているうちに、玲二のマンションに着き、知成と玲二が車に乗り込んできた。
「おっせーんだよ！　瑛美。おまえマネージャーだろ、しっかりしろよ」
偉そうに知成は瑛美に言った。
「はいはい、ごめんなさいね～知成様～」
瑛美が、ふざけた言い方で言ったあと、キッと知成を睨むと、知成は無口になった。

ここも上下関係がすでに出来上がっている。

(九) クラブ「W」にて・・・1

各業界人がむやみやたらとやってくる店・クラブ「W」。
二階ＶＩＰルームフロアにあるカウンターバーで、瑛美は愚痴っていた。

「でねでね～、これがまったくもってのわがまま坊主でさぁ」
ジンジャーエールの入ったグラスの口をくるくる指で回しながら瑛美は言った。
「はいはい、へーへー、そーなんだぁ」
「まぁね、林田さんが戻ってくるまでだからいいけどさ～」
「ほーほー、そうですか」
「ちょっと、結莉！　ぜんぜん聞いてないでしょ、私の話！」

愚痴の相手をさせられているのは、森原結莉・四十二歳。
音楽業界では「Ｋｅｉ」と言う名を名乗っているが、業界人にとっては「神」であり、世界的にも有名な作曲家である。
ちなみに、彼女の夫は、リリースするＣＤが常にトップ１０内に入っているバンド「リフィール」のボーカルをしている。
瑛美にとって結莉は、「神」でも「有名作曲家」でもなく、「姉」と言う感じの存在だ。

瑛美の愚痴を苦笑いしながら結莉はテキーラをあおっている。
「それで、瑛美はその知成くんとやらが、好きなわけね？」
「んがっ？　なに言ってるんですか！？　そういうことじゃないです！」
結莉の問いに一瞬、ドキッとしたが、瑛美は平静を保った。

「はいはい、えーと、その知成くんとやらが、わがままで俺様で腹が立つので、早く林田さんが帰ってこないかなぁ、と、瑛美はそして、早く知成くんと離れたいなぁ、と。そういうことでしょうか？」と、結莉は不敵な笑みを浮かべ、横から瑛美を覗き込み言った。
「…まぁ、…それに近い、感じ…」
そう言い、俯いた瑛美に、結莉の不敵な笑みが不気味な笑みに変わった。

まだまだ続く瑛美の話を聞いていると、二階フロアのドアが開き、数人の客が入って来た。
「おうっ！　結莉、夏木、なんだ来てたのか」
驚いたような男の声に、二人は振り返った。
「あら、吉田さん」
「社長！　あっ、」
吉田とホーサイレイの三人がいた。

「けぇ～、なんで瑛美がいんだよ…」
知成はふざけた顔を作りそう言ったあと、瑛美の隣にいる結莉を見て、緊張が走った。
「ケ、ケ、ケ、Ｋｅｉさん…」
「失礼ね、私はケケケケケイじゃないわよ。ただのＫｅｉですけど？」
結莉は、冗談ぽく少しムッとした顔で言った。

ホーサイレイにとって結莉は、結莉でなく、恐れ多い有名音楽家の『Ｋｅｉ』だ。
怒らせたと思った三人は「すみません」と頭を下げたが、そんなことで怒るわけもない結莉は、笑った。
三人は過去に一度、業界のパーティで結莉と会っているが、ホーサイレイはその他大勢の中の一組として紹介されただけで、話をするのは今日が初めてであった。

「あっ、今あなたたちの噂してたの。特にボーカルの子の、ね、瑛美」
「……（余計な事を）」
そう言われた瑛美は、目を細めて少し顎を出し、結莉を見据えた。
「なんだ、夏木、こいつらの愚痴でもこぼしてたか？」
するどい吉田である。
「違います。結莉にホーサイレイのプロデュースお願いしようかな、って思って頼んでたんです！！」
そんな話はひとつもしていないし、聞いていない。
寝耳に水ならぬ、寝耳に洪水を受けた結莉は、小さい小さい音で「ぇ？」と言い、目を点にし、瑛美を見た。
「「「えええっ！　マジですか！！　Ｋｅｉさんのプロデュース！？」」」
ホーサイレイの三人が騒ぎ出した。
「なんだ結莉、やってくれんのか？　おまえのプロデュースなら万々歳な結果は目に見えてるぞぉ！」
吉田の顔もほころんでいる。
「いぇ、あの……」
口ごもる結莉の顔を、瑛美が大振りで覗き込み、「むふっ」とニッコリとした。
「ぁ、あー、はい…。その方向で検討してみます…。後日、吉田プロさんの方にご連絡させていただきます、はい」と、流されてしまった結莉を横目で見つつ「よかったですね～社長～ほほほ～」と、瑛美は、わざとらしく笑った。
「おー、楽しみに連絡待ってるぞ、結莉。夏木も良い仕事したな！　天下のＫｅｉだぞ！　ライバルプロダクションに自慢できるぞー！」

吉田とホーサイレイは、万歳三唱を始めた。

結莉は、吉田とも顔見知りの仲間と来ているので、「一緒に飲みましょう」と誘った。

吉田たちが先にＶＩＰルームへ向い、姿が消えると、結莉は、真顔になり瑛美を見た。

「マネージャーの夏木さん、どういうことですか？」

「成り行きで、へへへ。結莉だって成り行きで返事しちゃったじゃない」

「うっ…。はぁ…瑛美のお願いだし、ちゃんと考えるけど…」

「本当に？　ありがとう、結莉～」

瑛美は結莉に抱きつき、お礼を言った。

「だけど、彼らの音楽を聴かせてもらって、私が納得したら…の話よ？　それに、今すぐにとはいかないわ。私にも今かかえている仕事があるし、もしプロデュースの仕事するとしても、瑛美がマネージャー代理の間には無理。林田さんが戻ってきてからになると思う」

「うん、それでも全然構わない。やっぱり、結莉と仕事するならベテランの林田マネージャーがいないとダメだと思う」と、瑛美は言った。

音楽プロデューサー「Ｋｅｉ」と仕事をしたい音楽関係者は次から次へと現れるが、「Ｋｅｉ」は簡単には仕事を引き受けないと言われていた。

が、今回は瑛美に流されてしまった。

「林田さん喜ぶね、きっと。骨折したかいがあったって！　こういうのって、わざわいころんでふくとなす、っていうんでしょ？　なんで「服とナス」なの？」

「…瑛美、それ、誰に教えてもらったの？　意味がまったくわからない…」

と、変な顔をした結莉が訊いたが、瑛美の顔は真面目だ。

（十）クラブ「W」にて・・・2

吉田達が、結莉に教えられたＶｌＰルームに顔を出すと、ソファに座っていた音楽関係者が一斉に吉田に挨拶をした。
吉田は、とぼけた性格だが、業界では顔が広く、みんなに愛されて…というか、年配の割には若い人間の気持ちを良くわかり、冗談も通じるので人気者だ。

部屋の中には、ホーサイレイが知る顔もちらほらあったが、吉田は一応全員に三人を紹介し、すでに結莉との仕事を前提に「これからっ、こいつらっ、すっごいよっ？」と、いたずらっ子のような顔をした。

飲み始めてしばらく経ち、知成が二人に言った。
「さっき、Ｋｅｉさんのプロデュースの話で舞い上がっちゃってたけどさ、瑛美って、なんでＫｅｉさんと一緒だったんだ？　結莉って呼び捨てしてたし」
「そうだよ、Ｋｅｉさんのこと呼び捨てなんて、普通だったらできねーぜ」
「社長に聞いてみようよ」と、吉田を見たが、わいわいとご歓談中だ。

「本人に聞いたほうが早いんじゃね？」
玲二が言い、三人は瑛美が来るのを待ったが、中々来ない。
その代わりに、『歌のリラックス』のプロデューサー・小沢とディレクター・小野山がグラス片手にホーサイレイの脇を固めた。

「この間は、ありがとう。番組に出てくれて」
プロデューサーの小沢は新人、無名、ベテラン、人気の有り無し関係なく、一緒に仕事をする人間に対し、感謝を忘れない、できた人間だ。
「いえ、僕たちの方こそ、出演させていただいてありがたく思ってます」
三人は頭を下げた。

「次は来月だな」
「「「はいっ！！」」」
目を輝かせ返事をする三人である。
来月にはあこがれの歌番組『今夜だけＢＡＮＤ天国』の収録がある。
小沢は、この番組のチーフプロデューサーの位置にいる。

「来月のことを思うと、すでに緊張してます！」
一行が背筋を伸ばした。
「俺なんて、カレンダーに花丸ついてます！」
玲二がうれしそうに言った。

「あはは、おまえら緊張なんてしなさそうだな。この間の収録見ても、緊張感ゼロだったじゃないか。瑛美も言ってたよ、ホーサイレイは張り詰めた針金を真っ二つに切るタイプだって」
小　野山が笑いながら言った。
「針金…って、糸じゃないんですかぁ、俺たち」玲二がガクッと首を倒した。
「あいつ、時々日本語おかしいから、ははは、かわいいよな」
小野山から出た瑛美の話に、局でのことを思い出した知成は、小野山にキツイ視線を送ってしまった。

「小野山、おまえ、もう帰った方がいいんじゃないかー？」
少し離れたところから、声がすると、別の男たちが、「十一時過ぎてっぞ！　奥さん身ごもの身だろ」
「そうだよ、一人じゃかわいそうだよ、早く帰ってやれよ」と、周りが口々に小野山を急かした。

「奥さん…？　小野山さん、結婚されてるんですか？」
知成は少し驚いた声で訊いた。
「うん、もうすぐ子供も生まれるんだ」と、デレっとした顔で言った。
「え、じゃぁ、瑛美は…」
そう訊いた知成の声は、「しあわせ者―」と言う誰かの声に消された。

小野山が出て行ったあと、入れ替わるように結莉が部屋に戻って来て、小沢の隣に座った。
「あれ、瑛美は？」
「ん、タクシーのところまで小野山のお見送り」
小沢と結莉の会話に、知成の顔は曇った。

「どうした？　知成」
一行に突かれたが、「いや、べつに？」と言い、目を伏せた。
（どういうことだ？　瑛美は小野山さんに奥さんがいること知ってるのに付き合ってる？　不倫ってこと？　イケメンの彼氏もいるのに…？）
知成の頭の中は、どんどんといろいろな考えがあふれ出てきて、周りの話声など耳に入らなくなった。

「どうしましたー、難波知成くーん。難波くーん？」
結莉が知成を呼んだが、全く気がつかない。
「おい！　知成！　Ｋｅｉさんが呼んでるぞ！」
玲二に頭を叩かれ、顔を上げた。

「あっ、はい」
「あれ？　知成くんは、瑛美ちゃんがいないからつまらないの、か・し・らぁ」
結莉お得意の『企みの目』をして知成をからかった。
「な、ななななななんで、瑛美、ななんですか！」
「な、な、なに「な」ばっかり並べてんの…」
動揺丸出しでどもる知成に、驚いた結莉も、どもってしまった。
「すみません…」と知成が謝っていると、瑛美が戻って来た。
「あっ！　瑛美、おーのーやーまぁああ、の、見送りご苦労！」
結莉が「小野山」をものすごい勢いで強調して言い、瑛美を知成の隣に座らせた。

「結莉、おまえさぁ、また何か企んでんだろう」
隣にいた小沢は、呆れた顔で結莉を見て小声で言った。
「何、それ」
「今度は、瑛美と知成くんか？」
「何、それ」
「…なんでもないよ、もう勝手にやれ」
小沢は、すっとぼけた顔で目をパチパチする結莉に鼻で笑うしかない。
結莉の趣味は、勝手に「男と女をひっつける事」である。

知成は隣に座っている瑛美に、小野山のことを訊きたかったが、

一行が先にＫｅｉと瑛美の関係を訊いてしまい、知成はタイミングをのがした。

結莉も加わり、瑛美との出会いを話し始めた。

瑛美の一番上の兄は、結莉がアメリカで仕事をする時のコーディネーターだった。

当時ハイスクールに通っていた瑛美は、結莉がアメリカにくるたびに一緒に食事をしたり、遊びに行ったりしていた。

日本に来た瑛美が仕事をしたいと言いだした時、結莉は「Ｋｅｉ」の仕事を手伝わせ、それは、最近まで、瑛美が吉田プロに入るまで続いていた。

瑛美の顔の広さは、結莉があってのものだった。

「だからぁ、結莉は、私のお姉さんみたいな人なの～」

「だからぁ、瑛美は、私の妹みたいな人なのぉ～ん」

と、結莉は色っぽい声で、瑛美の話し方のマネをして言った。

「私、そんな言い方しません！」

下唇を出して怒る瑛美に、みんなは笑ったが、一人違うことを思っている男がいた。

（はぁぁ～、Ｋｅｉさん、エロっぺぇぇなぁ～）

玲二である。

結莉を見つめる玲二の瞳の中はすでに、ハートマークでキラキラしている。

「Ｋｅｉさん、モノマネもできるんですね？」玲二が笑顔で真っ直ぐに結莉を見ながら言うと、

「ねぇねぇ、『Ｋｅｉ』さんじゃなくて、『結莉』でいいよ。みんなそう呼んでるから、ね」

そう言った結莉の微笑みに、ノックアウトされた礼二であった。

（十一）解けた大いなる誤解

早朝六時半、九時から始まるスチーム撮りのため、瑛美は朝も早くから知成たちのマンションを訪れた。
一行は美也子に起してもらえるから問題ないが、玲二と知成は心配だ。

二人を起そうと、いつものように寝室のドアを開けたが、今日は知成一人がキングサイズのベッドに寝ている。
玲二の姿はないが、ひとまず知成を叩き起した。
「んぁー、何時だよ」
体だけ起こし、目が開いていない知成が訊いた。
「六時四十五分ほど」
「はぁ？　おまえ、バカじゃね？　九時に着けばいいんだろ？　スタジオ…」
そう言うと、知成はまた掛け布団を頭から被った。

「何言ってんのよ、今日はバナナじゃなくて、ちゃんと朝食食べてから行くのよ。体がもたないでしょ？　サンドイッチ作ってきたから、起きて食べて、支度するの！」
瑛美は力づくで、知成をベッドから引きずり出し、ダイニングの椅子に無理矢理座らせた。

しぶしぶ椅子に腰を下ろした知成は、体に力が入らず、テーブルに、だらりと伏せたが、バシッバシと二度ほど瑛美に頭を叩かれた。
「っ！　いてーだろーが！！」
「ほら、食べなさい。そんな、デレっとしてないで」
「うわっ、いてー、なにすん、ふがぁー」
瑛美は知成の前髪を持ち上げ、タマゴサンドを口の中にねじ込ん

だ。
無理やりというより、暴力的だ。
「あっ、おいしい…これ…」
「当たり前でしょ？　私が作ったんだから」と、瑛美は、シレっとした顔で言った。
「ねぇ、玲二は？」
他の部屋にもいない玲二が気になった。
「あいつ、昨日から泊まり」
「泊まり？」
「女とホテル。でも八時前にはちゃんと帰ってくるって言ってた」
そう言った知成に、瑛美は眉を寄せた。
（玲二が女と一緒？　玲二は女でもＯＫな人？　っていうか、知成はそれでいいの？）
玲二と知成の関係をずっと勘違いしている瑛美は、知成を見つめながら、悩んだ顔つきで考えていた。

「ねぇ、マジこのタマゴサンドうめ～な！　でもなんで焼き卵なの？　ゆで卵じゃねーの？」
瑛美が作るタマゴサンドは、厚さ二センチの焼きタマゴが千切りキャベツと共に挟んである。
「え？　ん、玉子焼き…」
「質問に答えてねーし…」
瑛美にとって、卵の話はどうでもいい。
「知成は、いいの？」
「何が？」
「玲二が、他の…、んーと、泊まりとか、朝帰りとか、そういうのしても」
もぐもぐ口を動かす知成に訊いた。

「どうして？　オレ関係ないじゃん？　あいつのプライベートなんて。どんな女と遊ぼうとセックスしようと、なんでオレが気にするわけ？」
「ふ～ん、そう…（お互い自由な恋愛なのかぁ…。でもこのマンションは二人の世界ということなのね…。まぁ、そういうのも有りなのかもね…）」
瑛美はテーブルに頬づえを付き、知成の顔を見ながら、うなずき思った。
自分のことを見つめつづける瑛美の視線に、知成は顔を赤らめた。
「な、なに見てんだよ」
「え、べつにぃ？」

「ところでさぁ、おまえ、男とか…彼氏とか…いるの？」
今度は知成が訊いた。
「今？　いない。離婚してから、そういのごぶたさぁ」
『ごぶたさ』ではなく『ご無沙汰』であるが、二人は気が付かない。
「離婚！？　瑛美、結婚してたの！？」
持っているタマゴサンドを落とすくらい知成は驚いた。

「うん、一行から聞いてないの？　一行って結構口堅いんだ。別に言ってもいいのに、ね？」
瑛美は、一行に話したように、知成にも自分の離婚話をし、知成は真剣に聞いてしまった。
「だから、仕事が楽しいから、彼氏いな～い」と、瑛美はおどけたが、知成は思った。
（彼氏はいなくても、男はいんだよな…不倫もしてるし）

「あのさぁ、ふ、不倫とか、どー思う？　瑛美は…」
思わず訊いてしまった知成は、瑛美の目を見れず、コーヒーカップの持ち手を人差し指で撫でてみた。

「不倫かぁ、（あっ、もしかして知成、玲二のことで悩んでる？
玲二が他の女のところに行くことがイヤなのね…）」
瑛美は勝手に思い込み、俯き、カップを弄ぶ知成の姿に、胸がキュンとなった。

（そんなに玲二のことが好きなんだ…）
「恋愛は自由だと思うけど…、私は不倫は…イヤ…。自分だけを愛してくれる人がいい…」と、瑛美は言い、今度は瑛美が目を伏せ、知成が顔を上げた。

（あ、やっぱコイツ、悩んでんだ…小野山さんとのこと…）
「じゃぁ…、結婚なんてしてない人と付き合えよ…」知成が言うと、瑛美は顔を上げた。
「…へ？」
「…へ？じゃねーよ。自分を惨めにさせるようなヤツと付き合う必要なんてないだろ？」
「ん…？　うん、そうだよ…ね」
瑛美は首を傾げながらも、知成の言葉に同意したので返事をしてしまった。
少し、沈黙していると、ドタドタと玲二が帰って来た。

「あれ～？　瑛美、もう来てたの？　あっ、何いいもん食ってんの？」
玲二は、テーブルのタマゴサンドをガバッと掴み、口に入れた。
「あっ、うっめぇぇ～。瑛美が作ったの？　いい嫁さんになれるよ！　でも瑛美の性格なら、だんなに不倫されちゃったりなぁ～。ぎゃははは～」
「「……」」
キッと玲二を睨んだ二人だが、思う心は違っている。

「知成、聞いてくれよ。友達に紹介してもらった昨日の女さぁ、俺とのエッチが、だんなと別れてから数年ぶりのエッチだったんだって〜。でさ、息子が大学生なんだって――――――」
つらつらと、平気な顔で夕べの情事について話しだす玲二に、瑛美の顔は引きつりまくり、聞くに堪えられず、テーブルを叩いて立ち上がった。

「玲二！　あなた、あ、あなた！　知成の前で、よく、よくそういう話を平気で、話せるわね！　少しは、知成の気持ち考えたら！？
知成もこの際、言ってあげなさいよ！　ほらっ！」
と、怒鳴り、怒鳴られた玲二と、自分の名前が出たことにわけのわからない知成は、ボケッと瑛美を見るだけだった。
「知成も、なんとか言いなさいよ！」
「なにを…言うの？」知成が困った顔をし訊いた。
「玲二が他の女と浮気するから、悩んでるって、心が苦しいって、言ってやりなさいよ！」と、言った瑛美の顔は必死だ。
「えっ？　オレがなにに悩んでるって？　心が苦しい？　玲二の浮気でぇ！？」
知成と玲二は顔を見合わせた。

「だって、知成と玲二は恋人同士なんでしょう？　裸で一緒に寝てるし、お風呂も一緒に入るし、」
瑛美の言葉に玲二が笑い出した。
「あははー、マジ？　瑛美、マジで言ってんの？　俺ら、別に一緒に寝てんのって普通だよ？　一行がいたときだって、自分たちの部屋はあるけどさ、三人であのベッドでよくゴロ寝してたし、それに、俺ら、そっち系じゃねーし！」
玲二が言うと、瑛美は、真っ赤になり、椅子に座り、「うっそー、恥ずかし、私！」と、手で顔を覆った。
知成と玲二は、お腹を抱えて笑っていたが、瑛美はしばし立ち直

れなかった。

大いなる誤解が解けると、「あっ、そうだ、そうだ。あのね、」と、新しい仕事のオファが来たことを思い出した瑛美は、二人に話始めた。

週一度、深夜のラジオ番組のレギュラーの話だった。

ホーサイレイがゲストで出ていたラジオ番組を聴いていた構成作家が、三人のトークのおもしろさに目をつけ、二時間番組を持ってもらいたいと事務所に連絡がきた。

「で、秋から始まる番組なんだって、生放送だけど、三人とも夜中の仕事得意でしょ？」

「なに喋ればいいの？　俺たち三人でやってもまとまらないよ？」

自分たちの性格をよく知っている玲二である。

「ちゃんと構成作家の人もいるし、選曲とか製作ディレクターと相談しながらやるみたいだし…。それに向こうからオファが来たレギュラー番組だよ？　二時間だよ？　すごいことだよ？　林田さんもうれしくて泣いてた」と、瑛美は言い、「これで、Ｋｅｉプロデュースのアルバムとシングルも決まれば、万々歳だよ～」と付け加えた。

自分でコーヒーを注ぎながら玲二が言った。

「うぉ～、ラジオはどうでもいいけど、（エロっぽい）結莉さんと仕事してぇーーーー！　でもさ、全部秋からじゃん？　秋って、瑛美は、もうマネージャーじゃなくなるんだぁ。林田さん復帰するし」

そんな玲二の言葉に、知成は顔を、窓越しの空に向けた。

（十二）ご褒美は何にする？

音楽専門誌の雑誌取材を終え、昼過ぎからオフになったホーサイレイは、瑛美の運転する車で、吉田プロに向かっていた。
「別に今日はもう仕事がないんだから、あなたたちは、自由にすればいいのに…」運転しながら、瑛美が言った。
瑛美は事務所に戻らなければならないが、ホーサイレイ三人は、オフになるにもかかわらず、事務所に行くという。

「今日、社長いるかなぁ～」一行が言った。
「いないわよ。なんか、ホーサイレイと違って、タレント部のものすご～く売れてる俳優がＣＤ出すんだって、それに付き添ってレーベルに顔出しに行ってるみたい」
社長であるが、吉田のフットワークは軽い。
自分の事務所タレントと一緒に頭を下げに回るのは、苦でもなんでもない。

「なんだよ、いねーのかよ。寿司とってもらおうと思ったのによ～」
知成が残念がる。
吉田がいるときは、吉田のポケットマネーで、高いものをデリバリーしてもらうが、居ない場合は、蕎麦屋止まりで我慢する。
「あなたたち、それが目的で事務所戻るとか言ったの？」
瑛美が呆れた。

「ねぇ、そのＣＤ出す俳優って、登戸祐二？」一行が瑛美に訊いた。
「そうよ、かわいいわよね～、登戸くん。ホーサイレイと違って、なんか素直そうで、ちゃんと敬語使うし、挨拶はできるし、女にも男にも人気があるしさぁ。あー、登戸くんのマネージャーがうらやましいわぁ」と、嫌味たっぷりに言った。

「なんじゃ、そりゃ！」
助手席の知成が瑛美の頭を小突いた。
「痛いわね、何すんのよ！」
「おめーが、変なこというからだろーが！」
「それより！　吉田プロタレント部の俳優が出す音楽ＣＤが、音楽一筋でやってるミュージシャンより売れたら音楽部の立場がなくなるんだから、ホーサイレイも頑張ってよね？　それでなくてもタレント部に笑われてんだから…ホーサイレイ……」
瑛美に言われた三人は、シーンとなり、最近ヒットチャートを賑わしてる演歌「置き去りの末に」が、カーラジオから物悲しく四人の耳に流れ込んだ。

事務所に着くとやはり吉田は外出中で、残念なことに加山もいない。
仕方なく近所の中華そば屋から頼んだラーメンを、四人ですすっていると食べていると、スタッフの一人が、「ホーサイレイのシングルが、七万超えたそうですよ！　凄いことです！」と、うれしそうに報告してくれた。

四人で喜んでいると、
「よし！　八万枚行ったら、なんかご褒美！　くれ！」
知成が瑛美に言った。
「ごほうび？　ごほうびって、なに？」意味がわからず訊いた。
「英語だと、なんだ？　ｒｅｗａｒｄ？でいいんだっけ？」一行が言った。
「あぁ、何かほしいんだ！　あなたたち！　じゃぁ、私のＫｉｓｓを！チュッ」
「いらねーよ」と、速攻に答えたのは玲二だった。

「なんで！」瑛美がムッとした。

「いらねーよ、瑛美のキスなんて。俺、できれば、３５歳以上とかの女性が好みだから」

「こいつさぁ、昔から年上の女しか相手にしないんだよ。まぁ、遊ばれて捨てられてんのは玲二の方なんだけどね、いつも」

一行が言うと、瑛美は先日のことを思い出した。

「そういえば、この間言ってた大学生の息子がいる女性…」

瑛美が玲二を見ると、悲しいことを思い出したのか、斜め上を見て遠い目をしてしまった。

「あぁ、その人にも振られたらしいよ。自分の息子と年齢が近い人と付き合うなんて、やっぱり無理！　って。かわいそうになぁ。ほら、これやるから元気出せ！」

知成は、そういうと、「薄いなると」を玲二の中華どんぶりの中に放り込んだ。

「おれも瑛美のキスはダメだ。美也子がいるし。何か物くれ、物。キスのご褒美は知成だけにしといてくれ」

一行の言葉に、知成の顔が赤くなった。

「な、なんでオレだけ、こいつのキスなんだよ。オレも物がいいに決まってんだろ！」

「どうしてみんな、私のＫｉｓｓを拒否するの？　もぉ～、チュッ！」

と、冗談ぽく唇を尖らせ、瑛美は知成に向かってキスをするマネをした。

「ざ、ざけんなよ、瑛美」

知成は、首筋辺りの動脈が異常な速さを増し、あせったが、飛んできた瑛美のキスを大袈裟に手で振り払う仕草をしてごまかした。

「でも、なぜ私が、三人に、ごほうびとやらをあげないといけないの…？」

少し納得のいかない瑛美である。

（十三）ご褒美はやはりキス。

よどんだ空気のライブハウス最高！　夜大好き！　夏嫌い！　暑いの勘弁！

夏・緑の草木・北海道の真ん中辺り・きれいな空気の中・明るい太陽の下。

普段では考えられない情況下で、「ビジュアルバンド集合・サマーフェスティバル・イン・ＨＯＫＫＡＩＤＯ野外ライブ」は開催された。

林田が、このスケジュールを入れた頃は、まだホーサイレイは知名度なしのただのバンドだったが、メディア露出のおかげで、一般若者にも名が知られるようになっていた。

出番は、三番目。これは、変わらないが、演奏曲数が二曲から三曲に変更され、増えた。

人気が出るということは、こういうことなのだろうか…。

「え、三曲も歌うの？」

「げぇ～、そんな長い時間太陽浴びたくないよ」

「日焼け…やだなぁ」

文句タラタラだった三人だが、サポートメンバーを交え、ステージに上がると、ノリノリで楽しそうに演奏した。

お客のノリも声援も、ありがたく全身で受けとめた。

無事、演奏を終え、ステージを下りたホーサイレイを見て、ホッと体の緊張が解けた瑛美である。

「な～んで私がこんなに緊張しなきゃなんないのよ…」
そんなつぶやきをしながらも、戻ってきた三人を拍手で迎えた。

まだまだライブは続く、最後の出演者がステージを下りたのは、九時半近かった。
スケジュールの関係で朝一番の飛行機で東京に戻るバンドは、空港近くに移動したが、ほとんどの出演者は、打ち上げに参加した。
たぶん長くなるであろう打ち上げ。
瑛美が、ホーサイレイの三人を打ち上げ会場に残し、先にホテルに戻り、シャワーを浴び、パソコンを開いた時には、深夜一時を回っていた。
デンジャラス佳代からのメールが入っていた。

『パンパカパーン！　ホーサイレイ、シングルCD八万超えて、九万になりました。おめでとう！　……でも、もうこのシングルは、ここ止まりかな～？』

余計な一言も添えられていたが、瑛美は、喜んだ。

みんなに報告をしようと、知成の携帯に電話をすると、眠そうな声が聞こえ、騒がしい会場にいるはずなのに静かであった。
「あれ？　どこにいるの？　知成」
不思議に思った瑛美が訊いた。
「ホテルの部屋。ちょっと寝てた」
「もう帰って来たの！？」

先輩バンドもいたし、いろいろな人に声をかけられ楽しかったのだが、疲れて眠くなり、帰って来たという。
昼の太陽にやられたらしい。

「玲二と一行は？」
「オレが帰るときは、まだいたよ？　玲二は、なんか…会場にいた熟女と消えた…」
「はぁあ！？　もぉー、なんで止めないのよ！　仕事で来てるっていうのに、私の監督不行届きじゃない！　あーもうダメだ…」
　電話の向こうで落ち込む瑛美に、知成は笑った。
「大丈夫だよ。そのうち帰って来るって、また振られてさ」
「あっ、そんなことよりね」
　瑛美にとって、玲二のことは「そんなこと」なのだろうか…、落ち込む割には、切り替えが早い。

「あのね、ＣＤが、九万枚いったんだって！」
「ホント！？　スゲーじゃん、ホーサイレイ！　十万突破も夢じゃねーな！」
　喜ぶ知成にデンジャラス佳代のメールの最後部分は、話さなかった。
「そうだね、十万枚いくと、いいね…」
「なに？　その無理そうな言い方」
「べつに？」

「あ、ラーメン食いに行かね？」
「ラーメン？」
「オレ、打ち上げ会場で、あんま飯食ってないんだ。ホテル戻る時、近所に二十四時間やってるとこ見つけた。一眠りしたら食いに行こうと思っててさ。だから、一緒に行かない？」
と、ベッドの中から起き上がり、瑛美に言うと、「行く！」という返事が返って来て、ロビーで待ち合わせをした。

「なにおまえ、ヒール履いて来てんだよ」
知成が瑛美の足元を見た。
「え、これで東京から来たんだけど？」
「ライブんとき履いてたスニーカーでいいだろ？」
「どうして？　あれは、動きやすいように履いてただけだよ？」
ヒールの高さは三センチ。
瑛美の身長にプラスされると、百七十三センチ。
知成の目線と瑛美の目線はあまり変わらない。

「おまえが、ヒール履くと、オレとあんまり身長かわんないんだよ…」
と、言い、少しいじけた目をした。
「しょうがないじゃない。知成身長何センチよ？」
「え、百七十五…」
「じゃぁ、このヒール履いても二センチの差があるじゃない」
「男の百七十五より、女の百七十三センチの方が、デカく見えるんだよ…」
「細かっ…。知成って身長とか、気にするんだ」
瑛美はわざと背筋を伸ばして、背を高め、知成に並んだ。

「っ！　やめろっていってんだろ！」
などと、もめながら二人がホテルを出ようとしたとき、タクシーが止まり、中から玲二が降りてきた。
「あー、玲二！　あなた、熟女はどうし…た」
瑛美が玲二に向かって言ったが、どうやら振られたらしい表情に、口を閉じた。
「おい、玲二、おまえも行く？　ラーメン屋」
「行かない…。もう寝る…」
玲二は、一人トボトボとホテルに入って行った。

「大丈夫かな？　玲二…」瑛美が心配そうに言った。
「大丈夫だよ、明日の朝になったら元に戻ってるよ。デートしに行くって言っても、だいたいいつも八割方、あんな感じで帰ってくるんだ、あいつ」
「へぇ～、モテないんだ。玲二くん」
エレベーターホールに向かい歩く玲二を二人は見届け、ラーメン屋に向かった。

知成が案内したラーメン屋の暖簾をくぐると、夜中だが、数人の客が座っていた。
カウンターに並び、味噌ラーメンを注文した。
「お姉ちゃんは、モデルさんかなにかか？」
カウンター越しの大将が訊いてきた。
「違いますよ」と、瑛美は少し照れたように言った。
「この町の姉ちゃんじゃないだろ？　こんなべっぴんさん、この町にはいないもの」
「大将、そんなこと言ったら、この町の女の怒って客が減るよ」
常連客のような男が、笑いながら言った。

（そうだよ、きれいなんだよ、瑛美は…誰から見ても）
知成は心の中で大将に相づちを打っていた。

店を出ると、風がひとつ吹いた。
「やっぱ、夏って言っても北海道の夜は涼しいんだね？」
「ん、そうだな。…おまえさぁ、なんでモデルとかタレントかにならなかったの？」
歩き始めた瑛美の少し後から、知成が訊くと、瑛美が振り向いた。
「なに、いきなり」

「さっきの店の人も聞いてきただろ？　モデルかってさ」
知成は瑛美の隣に並び、また歩き出した。
「瑛美、きれいだしさ、スタイルいいじゃん？　もったい…ないかなって。吉田社長に事務所誘われたりしないの？　タレント部にとか」
「私、小さい頃から、かわいいぃ～とか、きれいだね～とか、言われてた」
瑛美は、ニッと笑った。
「なんだよ、自慢かよ～」
「結構ｃｏｍｐｌｅｘあるんだよ？　私は、知成みたいな特別な仕事には向いていない。ライトを浴びるとか、みんなからの声援を受けるとか、そういう職種は、似合わない。それに、前の仕事も大好きだったけど、今の仕事も大好きよ。ホーサイレイのマネージャー」
と、瑛美は横を歩く知成に顔を向けて言った。

「ねぇ、瑛美のコンプレックスって、どんなの？」
「んー、アメリカにいたときもそれなりのコンプレックスがあったけど、日本に来てから思ったのは、今の日本の女の子ってかわいいじゃない？　クリクリしてる子多いし」
「クリクリって…、意味わかんねー」
「身長よ！　日本の女の子たちは、顔もかわいいけど、身長がかわいいの！」
と、瑛美は言った。

「百五十五センチとか、百六十センチとか、私の憧れ」
「百七十センチだって、いっぱいいるじゃん、日本の女の子の中にも」
「いいの！　私の理想は、百五十七センチ！」
「細かいよ、おまえ…」

「さっき、知成だっていってたじゃない？　ヒール、履くと自分と同じ身長になるから、イヤだって」
瑛美にチラリと見られた知成は、気まずい顔をした。
「嫌なんて言ってねーよ。好きになった女なら別に、背の高さなんて関係ねーし…」と、そう言ってしまった自分に、知成は赤くなった。
「そうだよね？　私の前のだんなさんも同じくらいの身長だったけど、あっ、Ｋｉｓｓするとき楽だった！　ははは～」と、小笑いの瑛美に、知成の顔は赤いままだ。

「あっ、なんか飲む～？　ラーメン奢ってもらったから、ジュース奢ってあげる」
自販機を見つけ、走っていく瑛美の後を、ジーンズのポケットに手を突っ込んだまま、知成は、ゆっくり歩いた。
「なに飲むぅ～～？」
静まり返っている町に瑛美の声が響いた。
「…デッケー声…。深夜なんだから少しは加減しろってーの」
一人言のようにつぶやき、知成は、歩いている速度を速めた。

「ねぇ、何にする？」
「おまえと同じのでいいよ」
「じゃ、これ！」
ボタンを押し、カラコロと出てきたのは「はちみつレモン味」の飲料水。

「私これ好きなんだ。はちみつレモン味は、結婚して二十歳に日本に来た時、成田空港で初めて飲んだ思い出の味なんだ。すごくおいしかった！」
「元ダンとの思い出の味じゃねーかよ…」

「そうだよ～。楽しくて大切な思い出は、いつもこの中にある」
と、瑛美は軽く言い、飲料水をコクコクと飲んだ。
自販機に二人並んで寄りかかり、美しい星空をみあげていた。

少ししてから、知成は瑛美をチラリと見てから、
「ん？」
急に瑛美の唇にキスをして、唇を放した。
「オレから瑛美へのご褒美。ＣＤ八万枚売れた…ご褒美。Ｋｉｓｓ ｆｏｒ ｙｏｕってやつ？」
内心ドキドキの知成だが、顔には出さず、気取って言ってみた。
「んふふふ、じゃぁ、」と、瑛美も知成にお返しをするように、チュッっとキスをした。
唇を放した瑛美は、
「なんか、ものすごくひさしぶりのチュウは、はちみつレモン味～」
と言った。
「ひさしぶり…？　キスってアメリカじゃ普通に挨拶だろ？」
それに託け、瑛美にキスをした知成なのだが、
「え？　アメリカ式の挨拶は、ハグとキスだけど、キスは唇じゃなくて頬にだよ？　唇にキスは、やっぱり恋人同士が当たり前よ？」
と、言われ、自分の取った行動に全身から汗が吹き出た。

そして、知成にとっても「はちみつレモン味」は、大切な思い出になった日である。

（十四）交差する思い

関西方面のローカルテレビとラジオの仕事で、三日ほど東京を離れていた知成は、お土産を持って、木造平屋建てに住む国次郎宅を訪ねた。

「国ちゃん！　元気～？」

「おう、知成か。座れ座れ」

いつものように、縁側に寝転がっていた国次郎は、知成の訪問を歓迎した。

「なんだ、アパートの彼女のとこに行った帰りか？」

「違うよ、国ちゃんに、土産持ってきたんだよ！」

知成は、国次郎に、一口大のお餅の中にみたらしが入った「みたらしだんご」を渡した。

「大阪の名物なんだって。餅だから、喉に詰まらせないように、ちょっとづつ食べなよね」

爺さんへの土産に「餅」…。

「なにを老人扱いしとる。一口で食ってやるわい」

と、言ってみたが、躊躇し、知成の言う通り少しづつ食べようと思ってしまった国次郎・七十九歳、先日誕生日を迎えた。

「彼女とは、うまくいっとるかい？」

「ん？　まぁね。大阪も一緒に行って来た」と、知成は、おもわず言ってしまった。

「なんじゃい、婚前旅行かい。おぬしなかなかやるのぉ。わしなんて、結婚式当日の夜まで、婆さんの裸体は拝めなかったぞ？　わしが童貞を失ったのは、二十五歳の初夜じゃった」

「……そう…なんだ…」

知成は国次郎の「初夜」話に頭をかいた。

「今日は彼女のとこに泊まりかい？」
国次郎は、いろいろと想像して訊いた。
現役は去ったようだが、そこは男だ、聞いてみたい、今の若者の現状を。
「泊まんねーよ。これから、家帰って、着替えて、友達と飲み会に行くんだ」
と、知成は言った。
「飲み会？　酒か？」
「うん、友達とね。国ちゃん酒飲める？」
「わしは、日本酒一辺倒だな。今度、一緒に飲もうか。わしは負けんぞ？」
「いいね～。飲もう飲もう」と、知成は嬉しそうに言った。
一時間ほど経ち、知成は腰を上げ、国次郎に「一緒に酒飲む約束忘れないでよ」と、言い残し、マンションに帰った。

マンションに戻ると、玲二がダイニングで、缶詰のみつ豆を食べていた。
「何？　玲二、まだ支度してないの？」
玲二は、パンツ一丁のままだ。
「だってよ、飲み会に来る女って、美也子ちゃんの友達たちだろ？」
今日の飲み会は、美也子が、学生時代の友達を三人連れてくると言う。
一行は美也子に「自分と付き合っていることを友達に隠すと言うことは、おれの存在が無いということになる。おれは美也子のなんなんだ！　彼氏のおれを友達に紹介しろー」と、美也子には嬉しい

言葉を言ったが、いざ、会うことが決まると、「おれ一人じゃ恥ずかしい」と気弱な態度になり、知成と玲二が無理やり誘われ、コンパではなく、『ただの飲み会で、おまえらは、おれの付添い人』と言う一行の言葉を信じ、同伴することになった。

「やだなぁ、俺行きたくないよ…」と、玲二はスプーンを、くわえたまま言った。

「まぁな、美也子ちゃん二十一？　二？　だっけ？　学生の頃の友達ってことは、同じ歳だな。まっ、一行のお願いだ、あきらめろ」と、知成に言われたが、

「あ～、なんで美也子ちゃん四十一歳とかじゃねーんだ？」

と、玲二は、本気でうなだれた。

「四十一歳…って、おまえ…それは、ちょっと…いくらなんでも」

知成は言葉を失くした。

玲二は、体全身でしぶしぶを現し、しぶしぶ知成に手を引かれ、待ち合わせの飲み屋に行った。

すでに一行と美也子、その友人達は来ていた。

知成と玲二が、挨拶をすると、「ほんもの～」「かっこいい～」などと言われ、知成は愛想笑いをし、玲二は笑わず、というよりも笑えず、会釈で済ませた。

初めて会う若い女の子は、苦手だ。

これが、熟女相手だと、玲二のテンションはレベルＭＡＸ、愛想の良い若いお兄ちゃんに変身する。

玲二の場合、ライブや、たまにあるファンクラブのイベントでは、若い女性ファンには、「冷たい感じが好き」と言われ、数は少ないが、三十代の女性ファンには「玲二くんの照れた笑顔が好き、かわいい～」と、感想が分かれる。

そんな玲二のことを知らない若い美也子の友達は、玲二のクールさに心を動かしている。

「なんか、三人とも、テレビとか雑誌とかと、ちっが～うぅ」一人の女が言った。
メディアでは化粧をしているが、普段はノーメイク。
スッピンの三人は、一般人よりは、少しカッコイイ男、という程度だ。

時間が経つに連れ、話さない、人の話もあまり聞いていない手持無沙汰の玲二のタバコの本数が増えていく。
「あれ？　いまごろ気づいたけど、玲二くん、タバコ止めたんじゃないの？」
と、美也子が訊いてきた。
「ぁあ？　ん、瑛美いねーし、怒るやついねーから」
美也子の質問にはちゃんと答える玲二である。

「ぇえ～？　玲二君ってぇ、彼女いるのぉ？」一人の女が訊くと、
「ううん、瑛美さんって、ホーサイレイのマネージャーさん。すんごく綺麗で仕事ができて、ほんとうにステキな人なの！　私のあこがれの女性」
玲二の代わりに、自慢げに瑛美を褒め称えたる美也子である。
「美也子ちゃん、もしかして瑛美に何か買収されてる？」
知成が笑いながら言った。
「だって、ほんとうのことじゃない。あっ、この間、瑛美さん言ってたよ？　美也子ちゃんの彼氏は一行でよかったね、って。知成や玲二だったら人生の半分、コエダメの中に捨てたようなもんだって～」
美也子はそう言い、「私、一行でよかったぁ～ふふ」と一行の腕を組んだ。
「コエダメ？　なんじゃ、そりゃ…」
知成は、訝しい顔をした。

肥溜めではなく、ドブの間違いだ…。

飲み会終了になると、お決まりコースでカラオケに行くことになり、女性陣四人は、全員でトイレに立った。

「……俺、帰っていい…？」

そう言った玲二の顔を、知成と一行が睨んだ。

「……ダメ、だよね」

「玲二が帰るんなら、オレも帰るよ」知成が言うと、

「おれを一人にするな…。美也子、カラオケ行くって張り切っちゃってるし、おまえらが帰って、おれも帰るなんて言ったら、美也子に怒られる…ってか、家賃払ってもらえなくなる…」

一行の涙ながらの訴えに、二人は、少しの同情をし、「しょうがない」と、カラオケまで参加した。

全国チェーンのカラオケ店。

「唄って騒いでハッピー館・六本木店」、美也子の行きつけのカラオケ店の近くに来ると、ちょうど店から出てきたらしい国内外問わずのモデルやファッション業界らしい人間で溢れていた。

美也子の友人二人が「受付してくる」と先に走って、店に入った。

行儀は悪いが歩きタバコで、みんなの後を、しぶしぶしぶしぶと歩いていた玲二が呼び止められた。

「玲二！　なに、タバコ吸ってんの！！」

「ぁあ？　だれぇ？」

と、不機嫌な声で玲二は振り向いたが、一瞬のうちに顔が強ばった。

「そうやって、いっつも隠れて吸ってたわけ！？」
瑛美だった。
「なんでここに…」
玲二は、すぐにタバコを足元に落とし、もみ消した。
「拾って片付けなさい」
上から目線の瑛美に、玲二は素直に従った。

「おいっ！　知成！　一行！」
玲二に呼び止められた二人が振り向くと、玲二の人差し指が瑛美の顔に向いていた。
「あ～ん、瑛美さーん」美也子がうれしそうに来た。
「あら、偶然～。今日はお外なのに頭大きくないね？」と、瑛美が訊くと
「一行と一緒だし、お店じゃないから」
「うん、美也子ちゃんは、この方がかわいい！」と、瑛美が微笑んだ。

「なんでおまえが、いんだよ」知成が言った。
「ん？　お友達とカラオケ大会で、これからクラブに行くの。あっ、耕ちゃん！耕ちゃん！」
店前にたむろっていたモデルたちと来ていた瑛美は、そのモデルの一人・耕介を呼んだ。

「耕ちゃん、ほらほら、いつも話してる本物のホーサイレイだよ？」
瑛美がうれしそうに、耕介に言った。
「いつも瑛美がお世話になっています。みなさんの噂もいろいろと、聞いてます」と、頭を下げたあと、耕介は、知成に目を向け、「あぁ、君は…」と、声をかけた。
「この間はどうも…」

知成が軽く会釈をした。
その様子に瑛美が、不思議な顔をした。
「会ったことあったっけ？」
「違うよ、前に役所の書類届けてくれた事務所の人。ホーサイレイの人だとは知らなかったから。その節はありがとう」また、耕介が頭を下げた。
「あ、いえ…」知成は、二コリともしない。

耕介の腕に絡まり、嬉しそうな瑛美が、知成に向かって、
「カッコイイでしょう。耕ちゃんは、私の自慢の、」
と、言い終わらないうちに、知成は、自分の隣にいた美也子の友人の肩に手を置き、「この子、オレの彼女。かわいいだろ～」と、瑛美に自慢ぽく言い、片方の口角だけを上げた。
知成を囲んでいた玲二、一行、美也子はぽかんとし、知成に肩を抱かれた美也子の友人は、「ぇぇ？」と、驚いたが、嬉しそうにした。

「吉田プロはタレントもミュージシャンも恋愛自由なんだから、問題ないだろ？　マネージャーさん？」
キツイ目つきで知成にそう言われた瑛美の指先は、絡ませていた耕介の腕をギュッと掴んだ。
それに気がついた耕介は、瑛美を見た。

「うん、…大丈夫だよ。一行と美也子ちゃんとのことだって事務所は知ってるし、知成が誰と付き合おうと、社長は反対しないよ」
と、瑛美が笑顔で言うが、それとは裏腹に、耕介の腕に瑛美の力が加わる。

受付をしに行った二人が、店の入り口から美也子の名を呼んだ。

「んじゃ、オレたち、これからカラオケなんで～、失礼します！」
知成が耕介に言い、背を向け、彼女の肩を抱いたまま店に向い歩き出した。

「瑛美さん、今度一緒にカラオケ行こうね！」美也子に言われ、
「じゃ、瑛美、あさって」
「寝坊すんなよ」一行と玲二に言われた瑛美は、
「十一時に迎えに行くから」と、力の無い笑みを浮かべた。

みんなが店に入るのを見ていた瑛美は、「耕ちゃん、私、先帰る…」と、俯いた。
そんな瑛美を見た耕介は、瑛美の頭を撫でて軽く抱きしめた。
「一緒に帰ってやるよ、ん？」
耕介に言われた瑛美は、うなづいた。

「ごめん、瑛美が具合悪くなっちゃったから、先帰るわ。悪いね」
近くにいたモデル仲間に、耕介はそう言い、止めたタクシーに乗り込んだ。

店に入った知成は、女の子の肩からすぐに、手を外した。
「知成、何やってんだよ。瑛美、誤解しちゃったんじゃね？」玲二に言われた。
「あはは、ちょっとからかってやっただけ」と、玲二に言い、
「ごめんね…えーと、名前なんだっけ？」と、女の子に訊いた。
「ええ～、ひっど～い。名前も覚えてくれてなーい」
と、美也子の友人は、頬を膨らました。

タクシーの中で、耕介は、窓の外をずっと見ている瑛美の肩に腕を回し、自分の肩に瑛美の頭を付けさせた。
「あいつか、瑛美の好きなやつは…？」
「ん？　そういうんじゃないよ。私は知成のマネージャー。代理だけど、ｍａｎａｇｅｒとｔａｌｅｎｔの関係な…だけ、だよ…」
「そっか」
耕介はそれ以上なにも訊かなかった。

（十五）すれ違ったまま（1）

知成に彼女ができたことに、心が痛む自分がいる。
ずっと前からほんとうは、気づいていた知成への「特別な好き」という気持ち。
自分自身にとって、知成は吉田プロの大切なアーティストだ。
マネージャー代理という、仕事上の関係。
それももうすぐ終わりになる。

瑛美は、押しつぶされそうな心が、これ以上成長しないように、知成に悟られないように、深い深い呼吸をして、知成のマンションのドアを開け、中に入った。
いつものようにいつもの笑顔で、二人を起こしに寝室に行こうと思ったが、リビングの方から話し声が聞こえてくる。
「……ぇえ？　もう起きてる！？」
ホーサイレイのマネージャーになって、こんなことは初めてであった。
（いつもこうならいいのに…）
そう強く願う瑛美である。

知成、玲二、そして二人を起してから迎えにいくはずの一行までが、ソファに姿勢良く座っている。
それも、支度が整い、すぐにでも出かけられる状態だ。
「どうしてっ！？」
と、瑛美はものすごく珍しいものを見たような顔をした。
「だってさぁ、今日は「こんばんてん」の収録だぜ！　完璧な体制でテレビ局にお伺いしなきゃな！」
「「だよなー」」

玲二がいうと、二人も声を揃えた。
「あ…、そう。…じゃぁ、ちょっと早いけど、行こうか！」
と、うれしそうに微笑んだ瑛美が言った。

どれだけ、『今夜だけＢＡＮＤ天国』に出演することを心待ちにしていたのか、はっきり態度で示してくれる三人に笑いがでてきたが、小野山と小沢に、ホーサイレイの出演を、半ば強引だったが、無理にでもお願いしてよかったと、運転する車の中で、三人の笑い声を聞きながら思っていた。

テレビ局には、予定の入り時間の１時間半前に着いてしまった。時間ギリギリや遅刻よりは余程いいが、これはこれで早すぎだ。すでに用意されていたクローク室に一旦は入ったが、一行と玲二が探索に行くと言い、出て行ってしまった。
残された知成と瑛美は、話すこともなく、お互い黙ったまま、少し距離を置いた場所で雑誌を読んでいた。

瑛美のプライベート用の携帯の着信音が鳴った。
「あ、耕ちゃん？　もう成田？　うん、じゃ気をつけて帰ってね？見送り行けなくてごめんね―――」
瑛美の携帯が鳴った時点で、見ていた雑誌をめくる手が止まった知成は、相手が耕介であるということがわかり、雑誌を見るフリをしつつ耳だけは瑛美の方に傾けていた。

電話を切り終えた瑛美は、知成に訊いた。
「ねぇ、その人のファンなの？　さっき玲二も見てたけど」
ボーっとしたまま見開いてあるページを見つめていた知成が、手元の雑誌をちゃんと見直すと、先月離婚した三十代後半の女優のヌード写真が載っている。
「……ぅわっ、ぜんぜん気づかなかった…」

急いで閉じた雑誌を放り投げたが、玲二はさっきまでそれを穴が開くほど眺めていた。

「今の、電話の人…」

知成がポツリと訊いた。

「ん？　耕ちゃん？　今日アメリカ帰るの、これから搭乗なんだって」

「アメリカ？」

「うん、時々仕事で日本に来るの。その時は、私の部屋に泊まるんだ。耕ちゃんもアメリカ生まれだから、畳の部屋とかにあこがれてさ、ホテルよりあのアパートの方が好きらしい」

少し知成と話ができた瑛美は、うれしくなり言った。

「ご自慢の耕ちゃんが、アメリカに帰っちゃって淋しいよな？　おまえも。さて、オレも局内散策行って来よう～」

知成は明るめの声で言ったあと、立ち上がり、部屋のドアノブを回した。

「おまえに、似合ってるよ…あの男。身長もオレよりデケーし」

瑛美に背を向けたまま、棘のある言い方で、知成は、パタンッ…と閉じ、部屋を出た。

「……耕ちゃんは、そんなんじゃない…」

一人残された瑛美は、閉められたドアを見つめ、つぶやいた。

（十六）すれ違ったまま（２）

他の出演者たちがぞくぞくと局入りをし始めたころ、共演バンドに挨拶をしに行き、着替えの準備をしなければならないのだが、一時間半前から局入りをしているホーサイレイの三人がクローク室に戻ってこない。

どこをどうほっつき歩いているのか、瑛美は仕方なく三人を探しにクローク室を出ると、廊下の一番端で三人が悠と話をしていた。

瑛美が悠に挨拶をすると、結莉の夫・修平が率いるバンド「リフィール」もすでに楽屋入りしていると知らされた。

人気実力共にトップを走っている「リフィール」にまずは挨拶をしないわけにはいかない。

瑛美は三人を引き連れ「リフィール」のクローク室のドアをノックした。

ドアを開けてくれたのは結莉であった。

「結莉来てたんだ！」

瑛美が驚いたように言った。

「うん、今日は仕事なかったし、一緒に来ないと修平くんのご機嫌斜めになるからね。ホーサイレイのみんなも、おひさし」“ぶり”と、結莉が言い終わらないうちに、玲二が自分の目の前にいた瑛美を押しのけ、結莉の顔面３０ｃｍに近づき、めちゃくちゃ瞳を輝かせ言った。

「結莉さん！　お久しぶりです！　収録見学ですよね、オレ頑張ります！！」

結莉の名を呼ぶ男の声に、畳で寝転がっていた修平は、ムクッと体を起こし、キッとした目つきでドアの方を見た。

この男、まれにみる相当の「やきもち体質」である。

「結莉、誰だよ！」
修平が、ムスッとした声で聞くと、瑛美とホーサイレイが挨拶に来たと言い、中に通した。
瑛美が、知成、一行、そして最後に玲二を紹介すると、結莉に気があることを直感している修平は、笑みを消し、眉間にしわを寄せ、斜めに顔を構え、玲二を睨んだ。
初めて会う「リフィール」に緊張の色を隠せないホーサイレイだが、玲二は負けじと修平を睨み返し、数秒睨み合った。
結莉と修平、有名人同士のこの二人が夫婦だということは百も承知の玲二だが、少々頑張ってみた。
その様子に気が付いた「リフィール」メンバーは呆れた。
「修平、いい歳こいて、なに若い子にガンたれてんだよ」
「悠の事務所の後輩だよ？」
「大目にみてやれ」
メンバーに言われた修平だが、「……やだね」と、一言言い、玲二から目を放さなかった。
修平にとって、結莉に好意を持つ男はみなライバルだ。

「ホーサイレイのみんなも、まだ他の共演者に挨拶済んでないんでしょ？　早く挨拶済ませて、準備しなさ～い」と、結莉が笑顔で言い、四人を部屋から出したあと、修平の方を向いた。
「修平くん！　ホーサイレイとはこれから一緒に仕事するの。いちいちそんな態度取ってどうするの！」結莉に言われた。
「あいつ、ぜってー結莉に気がある！　ムカつく！」拗ね始めてしまった。
「何考えてんのよ？　誰がこんなおばさんに好意持つわけ？　あの子何歳だと思ってんの？」
「人を好きになるのに、年齢なんて関係ねーんだよ。俺の俺による俺の感だ！」

「……アホらし。あ～、私カフェでコーヒーでも飲んでこよ～っと！」
「えっ、待てよ！　俺を置いてくなよー」
と、部屋を出て行く結莉を追おうと、修平は立ち上がろうとしたが、メンバーに「「おまえはいいから、早く着替えろ！」と、押さえつけられた。

完全に拗ねてしまった修平は、畳に寝転がり、畳のワラをムシり始めた。
「だから、いっつも言ってるだろ！　畳をムシるなってーの！」
メンバーのリーダーに手を叩かれた。
ＬＴＶ局のクローク室、リフィールが使う部屋はほとんど決まっている。
昔からこの部屋の畳は、修平の所為で頻繁に張り替えられている。

すべての出演者に挨拶を終え、自分たちの部屋に戻る途中、瑛美が玲二に言った。
「玲二……、あなた、そのうち修平さんに…、葬られるわよ…」
ボソッと言った瑛美の声には、冗談の色が全く見えなかった。

スタジオで出演者たち全員のトーク録りを行なっている間、各マネージャーや関係者が観られるように、スタジオ裏に設置されているモニター前で瑛美と結莉が収録風景を見ていた。

「ホーサイレイ、緊張丸出しだね～」
背筋を伸ばし、きっちり座っている三人を見た結莉が言った。
「あんなに緊張してる三人、初めて見た」
瑛美が笑った。

「でも、収録中でも好き勝手に暴走する男より、ホーサイレイくんたちの方がよっぽど初々しいくてかわいいわ…」
結莉は、ちょうどモニターにアップになった修平を見ながら言い、瑛美は深くうなずき同意した。

「もうすぐ終わりなんでしょ？　マネージャー代理の仕事」結莉が訊いた。
「うん…、あとスケジュール二つ」
「淋しい？」
「ん？　べ、つ、に？」
そう言った瑛美の顔を横目で見た結莉は、そのあと何も訊かなかったが、少し前まで、会えばよく話題にしていた知成のことを持ち出さなくなった瑛美を少し不思議に思っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6474m/

君の「愛してる」は俺のもの…？

2011年8月25日03時29分発行